



巻 頭 言

北風さんが、さよならを言い、
春一番が吹くと、もう春です。

春、少年は両手を広げ、大空をつかむ。

鳥が唄い、花が踊り、春を喜ぶ。

少年は今、とても幸せです。

若い炎が燃えています。

少年は思います。

ずっと少年の心でいたいと、

みるもの、きくもの、すべてがすばらしい。

そう感じる人間のままでいたいと。

何事もすばらしく感じる春。

若さがはじける春。

君はスプリングに、何かを感じてほしい。

目次

巻頭言	1	前期自治会会長 佐藤 潔	4
前期会長として	4	後期自治会会長 新井 隆 俊	4
後期会長として	4	座談会「行事に見る大手前生」	5
行事紹介	7		
校外教授・クラスマッチ・コーラス大会			
文化祭・水泳訓練と水泳大会			
体育大会・修学旅行・マラソン大会			
理科棟	11		
クラス紹介	12		
30クラス			
随 想			
純粹に生きた吉田松陰	27	大倉清校長先生	27
昨日・今日・明日	28	近松 淳一先生	28
散歩道	30	石川 承紀先生	30

クラブ紹介	全クラブ	32
-------	------	----

先生紹介	永井先生・増山先生・平先生・黒田先生・鈴木先生 松田先生・岸田先生・平口先生・岩上先生・長田先生 大倉校長先生	36
------	---	----

文芸

憂鬱の女留片	二年五組 秦 光広	42
神・人間・平穩——「野火」を読んで——	一年二組 清水 弥生子	44
THE ANGEL IN SCHOOL	二年五組 坂下 秀	45
ショートショート	水泳部 クラブノートより	47
「鏡」考	三年八組 安田 千恵子	47
編集後記	表紙・二年五組 坂下 秀	48
	イラスト・カット	美術部

前期会長として

会長 佐藤 潔

あなたは自治会についてどう考えていますか？自治会とは何であるのか。自治会本部とは何であるのかと考えてみたことがあるでしょうか、又今一度我等が大手前高校はこれでいいのでしょうか。

人がクラブに、又勉強に己の道を一直線に突っ走るのは確かに立派なことです。しかしそれだけで、それが他の事には「無関心」「無気力」ということでよいのでしょうか。自治会本部の事を考えてみると確かにこの仕事はつらいものです。次から次へと来る行事を消化するのに暇さえあれば本部室に足を運び、そのため当然クラスの人と交わる事が少なくなり、級から浮き上ったような存在になった者もいました。文化祭前などは特にひどいものでした。本部の大半のクラブ所属者はその部員に頭を下げ続けました。しかしみんなその中でよくやってくれました。それは「自分達がやらねば誰がやるんだ！」という何か一種の誇りのような自覚を各自が持っていたからでしょう。そしてその結果、たとえそれが成功と言えなくてもやれるだけやったんだという満足感と、これまでとは角度の違った、口では言いようのない何かを得たような気がしました。自分のやりたい事やらねばならぬ事をするのはいわば簡単なことです。しかし、少しくらい遠回りをして人も人のやりたがらない事に敢然と立ち向かっていく精神は必ずその人に何かを与えるものです。

百年祭の近い本校を自分たちの手でより誇れるものとしようではありませんか。

後期自治会長として

会長 新井 隆 俊

学生としては合格だが、若者としては接触不良の中古品——それが今の大手前生だと思ふ。クラブ活動や、校内球技大会の時は活発なのだが、肝心な時に、妙に大人しくなる。要するに情熱がないのだ。自発的な前進体勢をとることができないのである。

興味のないことには加わらない。まず自分から率先して行う勇気がない。すぐ衆に頼る。批判はするが、改善の方法は知らない。etc

——こんなところであろうか。皆、思い当たる節はあると思ふ。これらは、要返せば、実に要領のいい生き方であると言えろ。少し語気を緩めるなら『無難』であると言えろ。だが、これが、高校生、否、若者として意味のある生活なのだろうか。「勉強に忙しい」——それは言い分けと言ふものだ。ハイティーンたる者は、常に、反体制の芽を持っていなければならぬ。間違つた体制が上から押しつけられた時、息吹かせる芽を。

現在自治会本部は、常時、五里霧中の状態にある。生徒——自治会普通会員——の望む方向というものが、全く感じられないからである。少なくとも、各行事に対する反論なり改善提案なりの意見を持つてもらいたい。——今、私は切に望む。

最後に、この支離滅裂たる暴言を、今一度読み直し、暫の思考をお願いする。荒廢の危機に瀕した大手前を救うのは、貴方である。

座 談 会

「行事に見る大手前生」

前期会長	佐藤 潔
前期副会長	田中 裕
後期会長	新井 隆俊
後期副会長	大本 至宏
後期議長	川口 直輝
後期二年代表	坂下 秀
後期文化部長	永田 洋男

今年度号の自治会欄に、一体何を載せればいいかと、本部役員に尋ねてまわったところ即座に座談会ということに決まりました。が、その話題を決めるのにひと悶着。

「いろいろ投書あったらどうか？それを議題にしたら。」

「文化祭やノ文化祭にしよう。」

「自治会への無関心やなア、絶対。」

「テスト！」

……………というような感じで、いろいろ提案があったのですが、結局それをひっくり返した意味で「行事に見る大手前生」といったところに落ち着きました。ご存知の通り大手前高校は非常に行事の多い学校です。しかし、もはや以前のような活気はなく、行事そのものが有名無実化しつつある、といった状態になっています。皆さん

にとって行事とは何であるか？この座談会の中から、あなた自身、高校生活を送る上での方向づけをすると共に自治会本部の考え方も知ってもらいたいと思います。

永田 まず文化祭第二部のフォークダンスについて。今年はいろ

ろと問題がありましたけどどういう意見をもっていますか。

佐藤 一番の問題はフォークダンスの輪から抜け出す者が多くいたことかな。

田中 でも、全生徒が一つというわけじゃないなあ。面白いと思う者があれば、面白くないと思う者もあるよ。

大本 フォークダンスのやり方に問題があったんじゃないかな？

新井 つまり、あの全生徒一括式のこと？

川口 何であんな風にしたのか聞かしてほしいな。

佐藤 まず最初に例年通りのやり方でいいかどうかということ、文化祭の意義とは何か、ということが問題になったんだ。それから例年のやり方では、各学年ごとにはまとまるけれども、学校全体、大手前高校としてやるのにそれでいいのかということになって……。つまり例年通り、3と4クラスだけ一つの輪でやれば、それはそれで楽しいだろうけれども、文化祭として何らかの意義を求めた場合問題がある、という意見になったんだ。そこで、三学年一緒にやった方がいいのではないかなったわけ。しかし、この方は楽しさは半減するかもしれないし、やり方も難しくなるだろうけれど、こっちの方がいいのではないか、とみんなで話し合ったんだ。まあ、それが連絡の不行届もあるけれど、一部の反感を買ったわけな

のだ。

大本 うん。確かに連絡の不行届は痛かったよ。みんなその意義を理解していなかったようだし。

川口 しかし、その意義が意義にならずに終わってしまった。

佐藤 いや、まだあれは一年目だ。

坂下 今度から改善していこう。

佐藤 それにこういったことは何年もしているうちに、うまくいくようになると思うよ。

大本 上から押さえつけるようにしてやったのもまずかったと思う。

川口 ぼくのクラスでは女子が無茶苦茶怒っていたけどなァ。

佐藤 全体的に見て、三年生の女子が「年下の男子と手をつなぐのなんかイヤ」と反対したのが、一番多かったけれど……

なあ、男として年下の女子と手をつなぐのはイヤか？

大本 そんなことはないよ。

坂下 絶対にイヤノぼくは下級生の方がいいと思うけどなァ。

大本 上級生よりはいいな。

川口 やっぱ、上級生は気を使うもんな。

永田 ちょっと待ってくれよ。座談会になってないぞ。

佐藤 だから、俺は下級生の方がいいと……

永田 それが見えか!? (笑)

新井 まあ、そういう風に一部の不満はあったけれど、それはこれから解決すればいいことだろう？

佐藤 あかね。三年にしてみれば一・二年全部が後輩なわけよ。しかし、今の状況は同じクラブの中でしか先輩後輩を考えていないだろう？ やっぱそれだったらいけないのではないか？

全体のタテのつながりが全くないんだから。それは、文化祭で全生徒一括のフォークダンスやったからといって、完全に解決される問題ではないけれど、例え、百分の一の効果でもそういう機会を持つべきだと思う。

新井 きっかけにもなるだろうし。

川口 きっかけになっても、そのためにイヤな感じを持たれたら意味がないんじゃないか？

新井 そりゃあさ。文化祭を楽しめればそれは一番いいけどな。楽しんだ後、また元の状態に戻ってしまったら行事が何のためになるのかわからなくなるんじゃない？

川口 いや、そういったものは一年かけてじっくり作っていけばいいんじゃないか。一年間たっぷり時間があるんだから。それより、そのタテのつながりというものを文化祭という数少ない機会の一つの中で作ってゆくべきじゃないかな。

田中 言ってみれば文化祭は唯一の機会だろう？ それをあまり活用していない。

新井 しかし、そこまで考えなくてもー

佐藤 いや、行事というものはもっと考え直して行かなければいけないと思うよ。ただ楽しむだけだったら、その日学校を休みにして家で好きなことをやっていればいいんだから。今の行事にはあまりにも積極的な前進がなさすぎる。

田中 前進はあるよ。今までつき合っていないかっ人の意外な一面を知ったり、それにクラスのまとまりがよくなるだけでも大したもんですよ。
(しばらく沈黙)

永田 ところで、あの第二部に出るか出ないかに関して、親の承認があるだろうか？

佐藤 あれ困るねんなア。承認のない者は帰らすとかなア。………
大本 でも、やっぱり、夜遅いからなア。

佐藤 何やかんや言いながら先生は万一のことはかり考えてはる。

新井 万一のことを考えるのは仕方ないと思うよ。

佐藤 それにしても先生の干渉が強すぎる。

坂下 いや生徒自身がたよりないから。

新井 それは大手前だけじゃないだろうけれど。生徒の自覚が不足しているからだよ。もっとみんなが自治会に積極的に関心をもってくれないと。

こうして話をしてみると今さらのように問題の多いことに気がつききました。この話し合いはまだこの後も続きましたが、どうもはっきりとした結論は出なかったようです。しかし来年以後、きつとこの問題が解決されることを祈ってこの座談会は終わらせていただきます。



行事紹介

校外教授



私達にとつての楽しみの一つの校外教授は二年生を除く学年には年二回あります。春は下旬に、秋は中間テストが終わって、やれやれ、という時に行くのです。それゆえ、春の校外教授は、新しい級友と少し親しくなった頃のためにそれから後のクラスをまとめることに役立つと思います。又、秋の場合は、恐怖の五日間の後ですので気分転換して、一層勉強する活力を与えてくれ、口喧は話などしない級友との友好も深められるので、なくてはならない一日であると思うのです。

筆者の組は春、女人高野といわれる室生寺方面に杉野先生の引率で行きました。杉野先生は奈良・京都方面の寺院、建造物などについてとてもよく知っていらっしゃるので、その時は先生の提案に従って室生寺方面にしたのでした。先生と級友とお話しながら歩いていると、いつの間にか、親しみが増してゆきました。このような人間としてのふれあいが、後日のクラスのまとまりにつながり、私達を先生に理解してもらえきつかけになるのではないのでしょうか。

校外教授は、たった一日に過ぎなくても、前述のように多くの利があると思いますので、もっと私達はこれを活用し、高校生活を有効にしたいと考えているのです。

クラスマッチ

大手前における行事の特徴として、定期テストの合間を縫って行なわれるクラスマッチがある。ただひたすら勝つことを目標とし、頭の中に賞状を浮かべながら練習に励む。三年までもが、大切な時間を練習につきこみ、当日には、泥まみれになって、ただ走り、躍り、投げる。そこには灰色の青春という文字はない。

まず、一学期が始まって、そろそろ夏かなあと思うところにバレーボール大会が男女共に開かれる。一番最初のクラスマッチということもあり、この大会にかける情熱はすさまじく、朝の六時ごろからコートを取るために登校する人があられわたりした。早朝練習のため遅刻が減るのはよいが、授業中に疲れをいやす人も……。六人制・九人制とに分かれ、学年関係なしで試合が行なわれるが、最後は、チームワークのよいところが優勝するようである。

次に秋も深まってくると、男子はバスケットボール、女子はハンドボール大会が行なわれる。学年別で行なわれ、各学年の優勝チームで決勝リーグが行なわれ、校内一を決める。特に女子のハンドボールは、毎年女子ラグビーと陰口を叩かれ、あまりのすごさに幻滅する男子も……

また、冬になると、サッカー、女子バスケットボール、ラグビー大会等が行なわれ、北風の冷たい運動場で、寒さに負けず、クラスマッチファイバー。

クラスマッチに対する（賞状・名誉に対する）熱意、試合をしている時の真剣さは、教室ではみられない友の一面をみせてくれ、また、クラスの団結・意識を高めるだろう。

コーラス大会

大手前に六月がやってくると、青葉が色鮮やかに照り輝いてはそよ風にささやく校内では、早朝から男女入り混った雄々しくも清らかな斉唱が朝風にこだまするのである。

六月六日には初陣の一次予選が課題曲「沼」で、十三日には二次予選が自由曲によってきそわれた。そして文化祭第二日目、青少年会館において、決勝が行われた。

今回は例年になく独創的な選曲と優劣の判別をつけがたい接戦を交え、緊迫した大会であった。

文化祭

二大行事のひとつをなす文化祭が初夏の頃、盛りだくさんの催しでもって開かれる。

まず第一日目、第一部では、校内いたるところで、バザー、喫茶および文化系クラブやクラス発表としての展示があり、講堂では、劇やゲームが、体育館においての素人名人会として、音楽室でのミニコンサート等、大多数の人気を呼ぶバラエティーに富んだ催しがある。

今年度は大手前史上、記録的な数字にもおよぶ父兄や他校の来客を迎え、より華やかな文化祭第一日目であった。

二部では、歌集によるコーラスやフォークダンス等の歌と舞いの楽しい時を享受するのである。

こうしてロマンティックな落日の残光のきらめきとともに、文化祭第一日目の幕が閉じられるのである。

時を移し、青少年会館において文化祭第二日目の幕が熱気と興奮にみまわれながら開かれるのである。

コーラス部の合唱、軽音班やブラスバンド同好会による演奏、ダンス同好会の発表、落研による一席など他に演劇部、E.S.S.、放送部等の見る者を十二分にも楽しませてくれる演技発表会がある。

こうして二日目の終了でもって文化祭の幕が閉じられるのである。文化祭が昭和五十二年度から六月に移動され、それに付随する多種多様な問題が提起されるなか、我々大手前生は、これらの諸問題を急がず、あせらずにゆっくりと煮詰めかつ対処しながら、我が校独自の実ある文化祭を構築してゆくことが大きな課題ではなからうか。

水泳訓練と水泳大会

七月、太陽は照り輝き、いよいよ夏本番私達にとってプールの季節が到来する。その頃大手前新一年生恒例行事ともいえる水泳訓練なるものがある。この水泳訓練と称するものは服部緑地内プールにおいての約一週間の水との苦闘を意味するものである。そしてまた大手前生としてのゆるぎなき強靱なところをつちかう精神鍛練に根ざした行事をいうのである。この行事で新一年生は、夏の暑さ何するものぞという意気込みで日々刻々と大手前の校風になじんでいくのである。(ああ、筆者にはあの過ぎさった日々がなんとなつかくしく思われることであらうか。)

さて新学期。九月を迎えるところまた恒例の全学年対抗の水泳大会が施行される。プールサイドでは例年のごとく獣にも似た野生の声援がとどろく。力強く水をかきわけけるストロークにまたゴールをめざして力強く水を打つビートに、若き青春の血潮を目のあたりに

感じた。そしてクラスの団結が強まってゆくのを、秋空をゆく一片の雲に痛切に思うのであった。

体育大会

わが大手前高校は行事が多いといふことはいまさら言うまでもありませんが、春の文化祭と並ぶ大きな行事といえはやはりこの体育大会でしょう。いつもは手を抜きがちの体育の授業(こう書くと体育科の先生方のおとがめを受けそうですが)であります。体育大会の時期になると自然と熱が入り、体育大会で一躍花形になってやろうとねらっている者も少なくありません。しかしこの一見楽しい体育大会にも色々問題があります。たとえばリレーシヨン競技が多くなったといえまだもう一つおもしろ味に欠けますし、また体育大会という名を聞いただけで恐怖を感じる生徒達が多いということ。一なんて体育大会なんかやんねん。わてらみたいなドン足の出る幕ないで、まあはよ走れるもんだけ頑張り。」と半分開きなおっている人もいます。彼らの体育大会に対する恐怖と反感を取り除くために先生をはじめ自治会も手をやいているようです。が、そういう人に限って当日には応援服を着てはしゃぎまわり、観衆の笑いを誘っているのも隠せない事実であります。またいつもは重いかばんを片手に学校と家を往復している三年生もこの日はかりは勉強のことを忘れて力いっぱいトラックを走っているのもよい光景です。以前に大手前で、一三年生が秋になってもまだ走れるようじゃいかん。」とおっしゃったそうですが、走れないくらいじゃ勉強もできないでしょうから、今の大手前生はたのしいかぎりです。これからこの大きな行事を成功させてゆくために努力をかさねてゆきたいものです。

修学旅行

修学旅行のしおりを開くと、目的と題して、一つ日に「団体生活を通して秩序ある生活態度を学ぶ」とある。秩序あるかどうかは疑問だが、団体生活から学ぶことは多い。これから、昨年の修学旅行の記録を、皆さんに紹介しよう。去年は、信州・伊豆方面、四泊五日の旅だった。旅行の直前まで中間考査に苦しめられたわけだが試験も最終日となると、心はもう信州へ飛んでいた。さて信州に着すると、寒い！二日目、蓼科牧場から御泉水自然園へ行く途中リフトに乗ったが、手はかじかみ、からだはブルブル震えた。なんとこの日の気温は摂氏一度！しかし、そんな寒さも、白樺湖一周サイクリングで吹き飛ばした。美しい湖畔には、別荘風の喫茶店や古い民芸店。二人乗りの自転車は、大半が男女のカップルで、楽しそうに、あるいは重そうにペダルを踏んでいた。三日目は、展望のぶどう狩り。昼食もそこそこのいざ挑戦！そして、雄大な富士の山にため息をつきながら箱根へ。夜は、ファイヤーストームでフォークダンス。四日目は、富士見ランドで遊びまくった。ジェットコースターにゴーカートにびっくり館。久しぶりに幼い子供にかえったような気持になった。さて、この旅行はほとんどがバスツアーで、ガイドさんや運転手さんとも親しくなり、車内のレクリエーションも大いに沸いた。ホテルでの夜は、つもの話に花が咲いたり、お菓子を引っぱり出して食べたり。五日目は、私たちに別れを惜しむように朝から雨。五日間の旅行をあとにして、我々は帰路についた。この旅行は、忘れ得ない最高の思い出になるだろう。

マラソン大会

昭和五三年二月九日木曜日。マラソン大会があった。

S氏はこの日に備えて、前日まで放課後、大阪城を走っていた。また、S氏の友人であるO氏も某クラブで連日、体を鍛えていた。そしてその某クラブには、S氏には遠い敗因であると感じられる、O氏がいた。

当日となった。授業は二時限で終了。いよいよである。

ピストルが鳴る。

S氏は走った。必死で走った。しかし、体を重く包んでいる疲労はなんとも抗しがたかった。そこへO氏が追いついてきた。S氏はスパートをかける。しかし、O氏はじりっじりっと差をつめてくる「ウーッ」。S氏は苦しんだ。そしてやがて決定的瞬間が訪れた。

O氏の登場である。

S氏はO氏とO氏の顔を同時に見てしまった。それは決定的破滅であった。（結局、S氏・O氏とも二十番台となった。）

なぜならば「O氏とO氏は相似」だったからだ。事情を知るものはよくわかってくれるだろうが。

S氏は現在マラソン大会に闘志を燃している。

理科棟

放課後、クラブを終えた人々は食堂へと足を運びます。ザワザワとした雰囲気。「全日制の生徒諸君は、定時制の授業の邪魔になりますから……」という声も押しつぶされてしまいます。クラブを終えたあとの快よい疲労感が、食堂でいやされます。ひとときの憩いの場。雑談をし、笑い、大声でどなりまわります。そう、おかたい学校にあって唯一の心安まる場所、恋人同志の待ち合わせの場所であり、クラブのたまり場である食堂。この新しい食堂が出来て、ほんとによかったと思います。

思えば一昨年の二学期から始まった理科棟の工事は、生徒にかなり不便な生活を強いてきました。まず、大手前の誇る中庭が削られ、テニスコートが一面なくなり、そのかわりに鉄の板で囲まれた工事現場なるものができました。トラックが通り、安全のための陸橋が建設されました。大手前が東西に分かれ、それをかろうじて陸橋が結ぶという不便な毎日が続きました。そして昨年六月、待ちに待った新食堂のオープン。理科棟は四階の物理教室の工事を残して完成しました。

一階が食堂。設備その他の点で以前のものよりはるかにすぐれています。スペースの拡大、それにつれてのテーブル・椅子の数も増え、昼食時を除いてゆったりできます。昔はといえば、水もしたたるすばらしい食堂で、うす暗くて、水たまりがあつて、蚊が飛んで……。工事中には、今では男子更衣室となっている中庭の建物が、臨

時食堂となりました。いろいろと不便もありましたが、今では新食堂が出来上がり、昼休みに府庁へ出かけていた者も、学校で食べるようになってきました。府庁さまには、いろいろと迷惑をかけてきましたが、ここで「すみませんでした。」とあやまっておきます。さて、二階は生物室があり、三階は、化学講義室、化学準備室、化学実験室と立ち並んでいます。いずれも設備の点などでよくなっている、新しいことづくめの教室は、みんなの勉強意欲をかりたててくれるでしょう。

この記事は、一・二・三年そして新しく入ってくるであろう新一年生に読まれるでしょう。ということは、何の不便も感じずに新しい設備を使う人もこの記事を読むのです。私はその人に一言いっておきたいのです。この理科棟は、今までの大手前生および先生のガマンによってできたものです。新食堂を使わずに大手前を去った卒業生もいます。母校を去る前に、「もう一度マスターのカッ丼を食べたい」とアンケートに書いてくれた先輩もいます。そう考えて、食堂のラーメンを食べてください。なんだかしよばくて、歴史というものを感ずるのではないでしょう。

初めて理科棟に入った時の感想は、まさに「光っている」でした。もう、ただ食堂にいただけでうれしくて、あまり長くいすわり続け、迷惑がられたこともありましたが、その光り具合が、ちょっと鈍くなってきたという感じです。また、雨の日なんかは、廊下がすべて困るなどというぐちも出始めています。乱暴な使い方をしてはいませんか？落書きをしようとしてはいませんか？昔のガマンの上でできた新しい建物です。これからずっと新しいままで保っておきたいように感じます。

クラス紹介

一年一組

無定形生物のごとく実体不明の我がクラスを、これから紹介しなくてはならないと思うと、筆者は頭痛を催す。

その構成物質は著しく分化している（すなわち変り者揃い）にもかかわらず、拮抗作用の恩恵か、授業中はいたってまじめ。某先生曰く、「ちゃんと聞いているのか、寝ていて静かなのかどっちかしらねえ。」ちゃんと聞いている方に属するでしょうよ。それが証拠に定期試験の平均点は、いつも学年一。自己のエゴイズムに言わせれば、喜ばしからぬことですが、これは、我が一組のよき特徴の一つであります。

そして特徴の第二は、美型少女の多いこと。筆者は、悲しくもその輪の外におりますので、冷静なる客観視の上の判断であります。（その埋め合わせか、男子は……ですが——後が恐いかな。）

第三は、その一夜づけ型反応であります。要するに、どんな行事も目前にならないと活動を始めず、どたん場でちよつと頑張るだけなのに、なかなかの成績を修めるということです。ちなみに、バレーボール大会準決勝進出・コーラス大会決勝進出・ミュージック茶屋大はやり・体育大会上位獲得etc.

最後になりましたが、この生物の飼育係・数学の平瀬先生について。その言語・動作（ついでに容姿も）はインヘーダー級。我々は、かろうじて地球上生物に留まらん為、この汚染からの逃避と、先生

のすばらしき頭脳の搾取に、日夜励んでおります。
では、一組の栄光を祈りつつペンを置きます。

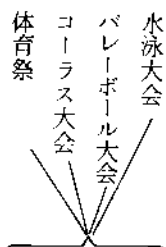
一年二組

わがクラス、一年二組とは一口に言って、（よく言えば）明るいクラス、（悪く言えば）さわがしいクラスです。これは目他ともに認めていることです。

そんな一年二組が今までにやったことをふり返ると……

文化祭……オバケ屋敷をつくりまして、これがバカ受けノ教室の横には延々長蛇の列ノまた、中で泣き出す人もいたりして……
もちろん、一年二組のみんな、特におぼけ役の人はいたいへん楽しんでおりましたノ

水泳大会
バレーボール大会
コーラス大会
体育祭



参加することに意義があるという感じで、みんな仲よくやっておりました。
コーラス大会では出だしから失敗したりして。結果は……ム、ム、ム。

とにかく、一年二組とは楽しいクラスだと思えます。ハイ。（しかし、これは、筆者の独断と偏見だったりして……。）

担任の高山先生は、たいへん温厚な先生です。（しかし、私たちは、たまにおこられることがあります。）

教室は、大阪城天守閣が左の方に見え、景色のよい、本館三階の三〇七教室です。

最後に一言、一年二組は、明るく楽しいクラスです。

一年三組

我が一年三組。純情そうな顔で入学して、はや一年。今では、ユニークな本性まるだしに、大声で笑っている。

校門の真正面に位置し、大阪城が一望に見わたせるこのクラス、大先輩の阪本先生を担任とし、環境的には、すばらしいものではないだろうか。あの入学当時、始業のチャイムを耳にすると、みな机に向かい授業中はわき目もふらず黒板と教科書とをにらめっこする毎日であった。ところがどうだろう。あれから七ヶ月、今やチャイムが鳴っていても、授業時間なのか休み時間なのかわからない時がよくあり、登校時間なんか非常におそくなってきた。

こういうクラスとて、文化祭・体育祭・その他数多くの校内行事となると熱心なクラスである。このような行事の前になると、大部分の人が学校に残り、よく全日制ぎりぎりの時間まで仕事をしたものである。そのころ回りのクラスをのぞきに行くと、少数の人がぼらぼら。「まだ、終わらないのか。」と心配した人が、我が組に多い証拠だ。しかし、文句を言いながら、みんな一生懸命やってきたのは、やはり、前・後期不動の会長・副会長のK&Kコンビがいてのものではなかったろうか。

大声ではたえまわる女性どもと、それを静かに見守る男性どもが、不思議ととけあったクラス—三組。地球に魔の手が迫るとき、ウルトラマンのごとく、三組は帰ってくるのだ。再び地球に平和が戻ったとき……「ガッツ」を見せてやろう。

一年四組

一年四組、一口に言ってしまうと、てんでバラバラなムチャクチャなクラスなのです。休み時間、自習時間などには、まさに蜂の巣をついたうるささで、学活の時間もまた同様です。今まで四組の教室で話し合いらしい話し合いはただの一度も行われたことがありません。それでも今まで諸行事をこなしていったのは、学活の場で発言しなくても個人的になにかと協力してくれる人が多かったからです。特に女子がそうでした。文化祭のときにも、参加申し込み期限が迫ってくるにもかかわらず、まったく方針がたちませんでした。

当時、会長であった筆者は半分さじを投げかけたのですが、その時ですんで劇の脚本を書き、あらゆる準備をしてくれたのは、女子の有志のメンバー達でありました。劇をやる事は、学活で決まったことではなかったのですが、不満らしい不満も出ず、無事、文化祭に参加することができました。筆者は胸をなで下ろしたのですが、反面、四組のまとまりのなさ、といったものをかいま見るようで、寂しさを感じずにはいられませんでした。こんな四組なのではあります。唯一、自慢できるものとして水泳大会三位入賞があげられます。あれはまさに、一人一人が無欲で、力いっぱい泳いだのが、高得点につながっていたのではないのでしょうか。

このように文化祭につけ水泳大会につけ思われることは、一人一人はすばらしい人間であるにもかかわらず、それが四組というクラスの性格につながっていかない、ということだと思います。その原因はやはり、みんなのクラスに対する関心のなさの一言につきると思います。

一年五組

一年五組とは、いろいろな性格の者のたまり場である。入学当時は、初めての高校生活ということで、みんな、おとなしかった。しかし、一カ月が過ぎる頃になると、みんな、性格を、あらわにしてきたのだった。

これは秋の校外教授で、京都に行った時の話である。京阪三条駅に着いた時、会長は、少しぐずぐずして、なかなか出発できなかった。そこでみんなは、ブーブーと文句を言った。やっと出発したら、みんなは歩くのがのろい。やっとのことで円山公園に着き、解散したら、集合時間を一時間、間違えて帰ってこない者がおり、みんなは、待機していた。「ほっといて帰えろやあ」という無責任人間がいたり、又ある者は、その時間を利用して石投げを楽しんだり、又ある者は、一人でブツブツと、ぼやいたり、正義の味方として、捜しに行った者もいた。結局は捜しに行った者が見つけて帰ってきたのだが、この事件で、一時間のロスを食ってしまい、円山公園と將軍塚しか行かなかったのである。

まあ、このチームワークの悪さが、一年五組の良いところなのである？こんなクラスを受け持たれた小野先生は、しあわせ者？だと思ふ。二年生になると、元一年五組の生徒が、それぞれに、散らばっていくのであるが、その全部のクラスが、一年五組の影響を受けていくのは必至の状況である。一年五組という集団も、あと四カ月余りで組がえになるのだが、みんなからの声援と非難に、こたえて、なんとかがんばっていききたいと思う。

一年六組

一年六組なるクラスが何故存在するのであろうか。未だもって筆者には謎である。ただ、このクラスを考えるに、担任H師の存在を無視しては考えられないことだけは確かである。

クラスに漂う何とも言えない雰囲気。しらけていて、活気がなく、それでいてどこか道化めいたおかしさのある……。言葉では、とうてい言い尽くせない。ただ、具体的に結果として言えば、コーラス大会、水泳大会、体育祭、大会という大会はすべて最下位。かといって、成績の方もそれほどよくはない。また、何につけても女子は男子より怠慢である。そして、未だかつて席替えというものをしたことがない。おおまかに言えば、たったそれだけである。

この数ヶ月間に、四十七人それぞれの心の中に残ったものは何であらうか。お互いの心が触れ合うこともなく過ぎ去った日々。担任の機嫌に左右される毎日。そして、このような日々が、ぬるま湯のような割り切れない雰囲気の中で続くであらう。その中で、いったい何が心に残るのであろうか。それは、H師の存在のみであらう。

今はもう冬、中庭の二〇一番教室の真下に咲いていた季節はずれの桜も、風の中に寂しく散っていった。ひっそりと、あまり人に気づかれることもなく……。同じようにして、我が一年六組も風のように去ってゆく時の中に、やがては消え失せていくのである。たとえば、その実体が四十七人それぞれにとって、つかみようないようなものであったにしろ、ごく普通に、ごく自然に……。ただH師のみが、そこに輝いているのである。

一年七組

「クラス紹介を書くように。」と原稿用紙を受け取ってから一週間余り。一向にペンが進まない。わずか六六〇字で我が七組の全貌を語ることが、できようか。(反語)それ程、話題の尽きないクラスなのですが、文句を言っておれないので本論に入ることになります。我が七組の担任高岡先生のおっしゃるには、七組は、個性豊かなおもしろい生徒が、いるのだそうで、その言葉通り、クラスには、冗談が飛び交い、笑いが絶えません。真に、なごやかな雰囲気を持ったクラスです。コーラス大会、水泳大会等(惜しくも入賞は、逃しましたが)クラスの皆が、一致団結して、一つの目標に向かって行く姿こそ、七組が、最も七組らしくなる時だと思います。また、七組の良い所だと思ふのです。が、その反面、七組は実に騒がしく某先生が、「もう少し静かにせんか」と、おっしゃることも、しばしば。また、学業面では、振わず、下から数えた方が、早いのです。良くいえば、明るく、楽しいクラス、悪くいえば、どこことなく、落ちつきのないクラス、こんなクラスの住人達を、いつも暖かく見守って下さる高岡先生は、不安定な私達の羅針盤であり、チャートであり、良きアドバイザーです。そして、先生なしで、七組を語ることはできません。また、不出来な私達ゆえ、随分、御心配をかけたことでしょう。そして多分、これから……。

最高のクラスといえる我が七組も、あと、五か月足らずで、消滅します。クラス替えをするには、真に惜しいクラスですが、これも運命だと、諦めつつ、最後に一言、七組に栄光あれ!!

一年八組

恐怖の入試、初めての受験から遠のいてはや七ヶ月。新しいクラス・友達：なにかとまどっていた私達も、大手前生として落ち着いた様子。そんな今、クラスをふり返って考えてみる価値はあると思ったので「クラス紹介」を書くことをひきうけたのだが……。

八組というクラスは、言わば大手前のガン?! も言うべき存在で、なにかと先生方ににらまれているのである。「八組のせいで、両隣の七・九組の成績が落ちて来ている。などと、言われたこともある。(このことについては、ただ隣だと言うことだけでどう影響あるのかとの反論もある。)」いろいろ言われた中でもいつも見守ってくださったのは、我々が担任「すりあしこと温厚岡田先生」である。掃除不十分を注意された時も、「こんな来てるで。掃除はちゃんとやっというてや」と、注意が書いてある紙を持って、ニヤニヤ笑っていらっしやる姿は、まるで「地上に降りた最後の天使」であった。でも決して先生にあまえてばかりいるのではない。その証拠に、成績の面では、(一学期の汚名をそそがんもの、みんなががんばった。)二学期中間のクラス平均は、地理学年一位、数学二位などの好成绩。これを見ただけでは、「なんや、そんなたいしたことないやん。」と思う人もいられるかもしれないが、一学期に比べて隔世の感あり。他の面では、バレーボール大会の五時起床、コーラス大会の予選七位通過、文化祭のおばけ屋敷「ミステリア」五百人以上が入場、水泳大会、体育祭と、自分達の力で、(半面、岡田先生を無視)男女協力し合い、一致団結!

高校生活第一歩にあたって、八組になったというめぐり合わせ。
八組全員 Lucky card を引いたと、感謝と満足でいっぱい!!

一年九組

われわれ五〇三病棟の連中は、ひとりひとりの個性（芸人性）がありすぎるがゆえに、クラス全体のまとまりに欠け、団結することが苦手である。かつてのビートルズのように。何かクラス的一致団結が必要である行事がせまった時には、前・後期を通じての巨人な会長および、九組らしくなくやる気のある者数名が、協力を呼びかけるが、みんなの足なみがそろわない。一・二日前になって急にあってやるから、実力を出しきれぬまま（？）涙をのむのが常である。クラスのムードは異様でつかみどころがなく、男子・女子の仲がいいようで、あんまり交流がない。授業中は、ある時は楽しくさわがしく、ある時はひどくしらけていて、先生の冗談にもシーンとしていることもあり、またある時はしらけたことに大爆笑が起こる。ようするに、特異な感受性をもっているわけである。

さらにその上、「宇宙の平和のために」と、はざくウルトラ研究会（略称・ウル研）なるものがはびこり、現在会員女子六名を含む十七名を数え、同好会昇進をめざし、大手前を征服する勢いだ。

最後に、われらが担任・平野先生について一言紹介しておこう。朝の五分間スピーチなどを提案し、クラスの交流をはかろうと努力して下さる、とてもよい先生であります。

こうして、原稿は完成しようとしている。四時半の提出時間まであと七分。いそげ文化委員／自治会本部へワープせよ!

一年十組

アナウンサー「X氏、十組についてどういう印象をお持ちですか。」

X氏「十組?、ああ、あのけったいな野郎どもの集団か。あの組は個性派がそろい過ぎとる。前後期の会長を見てみなさい。彼らは十組のシンボルだよ。そして君、自己紹介のときに落語をするような男を見かけたことがあるかね。レントゲン撮影のとき、のぞきたいがためにわざわざ双眼鏡を持ってくる男を見たことがあるかね。」
アナウンサー「それでは団結についてはどうですか。」

X氏「まあまあじゃないかと思う。が、少々自分本意の考え方がある。ホームルームなどのときに会長が前に立ったとき、誰も意見を言わず、人ごとのように思っとる。体育祭の応援のときなど、フイーバーしてるやつと、していないやつが完全に別れとった。これでは会長やフイーバーしているやつがかわいそうだ。みんなもって人のことを考えてやらねばならん。団体生活をしている限りは。」

アナウンサー「十組の雰囲気はどうですか。」

X氏「担任の鈴木先生を見てもわかるようになごやかなクラスだ。しかし最近ではしらけてきた。特に、男女間の仲がもう一つしっくりいかない。特定の人物に限られとる。これじゃいかんよきみ。共学に來たからにはもっと仲よくしなきゃいかん。」

アナウンサー「最後に、十組の今後の見通しについて。」

X氏「まあ、やればできるんだよ。一学期の保健、二学期中間のグラマの平均点を見なさい。某先生が驚いていたではないか。もっとやる気を出さなきゃ。そしてクラス対抗のものは、全員がフイーバーすること。勝敗にかかわりなく全員で応援してやることだ。」

一年十一組

ただいまから大へん可愛らしい我が11組の紹介をいたします。

私たち11組は保健体育・家庭科等は、単学級で授業を行うのです。だから他のクラスよりも有利な点もありますし、体育なんかは時々男女いっしょにすることもあるのです。うらやましいと思う人もあれば、なんとも思わない人もあるでしょうが、それはさておいて。

地理の授業の時、先生はうらめしそうにめんどくさそうに、

「このクラスは授業時間が足らんようになる。」とおっしゃる時があるのです。それもそのはずで、だれかかれかがおもしろく変な質問をし、先生がそれに答えられる。そのやりとりを聞いて、私達は笑って楽しみ、ちゃんと時間をつぶすのですから。

ところで11組の人物は皆まともな顔(?)して変なところがあるのです。良く言えば個性的で良ろしい。

体育祭のときなどはカッコの良いものです。一致団結し傘を使って応援し、点を沢山獲得し、後日各教科の先生方から――勉強もこの調子でがんばってください。――と励まされてしまい、その結果は事務室の横の会議室に居た時とは異なり、――ああ可哀相な11組よ！お前はそれらの期待をよそにどこへ行ってしまったのか。――という破目に陥り皆ただ今ハッスルしております。修学旅行もこの組で行きたいとか、マイホームのようなねという声もありますが、ほんとうに温室の中で暮らしているような心地のする学級男子26名、女子21名の1年11組であります。

二年一組

なーんとなんと、締め切りがとくに過ぎたこの原稿が、まわりまわって、僕のところに！ 文委、お前を呪う……。といつてもいまさらおそい。問題解決は、僕がクラス紹介なるものを書くこと。といつても、時間と文学才能のない哀れな子なんだから、拙い文章ばかり。でもひらにご容赦を！！

四月・一見陰気そのもの、その実、すずめの巣(原因はW)校外教授にいつてヨソヨソしさがほぐれる。ほぐれすぎて、もつれたところもある。(意味は読者の想像力次第)

六月・バレーボール大会において男子奮闘するが惜しくも敗れる。女子、何もせずトール然敗れる。つまり結果、散々。文化祭において、Y氏に全権をまかせて、おらたちにや……を上演する。内輪では好評なるも外知らず、コーラスについては、一次・二次を通過、本番では「自治会賞」なるものを受賞する。ひとえにN氏のおかげ。

とんで九月・体育大会において学年一位になるが、一年に負ける。コーラス・体育大会での多賀谷先生の評が身にしみる！！

十月・待ちに待った修学旅行、あれはほんとに学を修めてんのかね。なんせ、部屋割りで、風呂場の前があたったし、部屋の内はQueenとJackが生徒といっしょに狂熱してるし……ぶつくさ以上で現在にいたる。現在も狂熱気味、修学旅行につきものの二人組も続出。にぎやかなりしも僕さみし。よいよい、おのこ25めのこ21、担任一人(あつたりまえだわな。)今まで仲よくやってたんだからこれからはよろしくやろうぜ。な、兄弟。(紙面少ないぞ)

二年二組

我がクラスを語るにあたり、忘れてはならないのが、我が担任庭野先生です。この先生、なんとなくこれぞに見えますが、実はとても明るく、心優しい方なのです。ご参考までに、先生の得意な歌は「知床旅情」。

この、庭野先生を核とする我がクラスもまた、底抜けに楽しいクラスです。なにしろ、各種校内大会では、常に最下位争いをモットーとし、ほぼ確実にそれを遂行。授業中にはギャグが続出。それに加え、チームワーク（特に遊ぶことにおいて）のよさ etc……。

よい所(?)を数えあげればきりがありません。

行事をたどってみると、まずは文化祭。我がクラスは喫茶店「門」を開店。かき氷が大好評でした。テーブルには一輪さしがかざってあったりしたけれど、裏にまわれば、それはもう、凄まじいの一言につきます。同じものを作っているはずなのに、なぜか作り方がちがったりして……。でもけっこう楽しくやりました。それから修学旅行。ステキなガイドさんで、みんなごきげんでした。想い出の歌は「デビルマン」と「勝手にシンドバッド」。みんなの隠れた一面を見ることができました。

考えてみれば、笑いが絶えたことなどありませんでした。でも、そのすばらしいクラスとも、あと数ヶ月でお別れです。とても名残りおしいけれど、たくさんの想い出を心に刻んで、笑顔でさ・よ・う・な・ら・う。

最後に、せめてバスケットボール大会はがんばろう！（おしま

二年三組

校門を入り、食堂の前を通り、ばばちい校舎に入って、なにげなく見てみるとその一番奥に、高級クラブ「スカンタコ」のネオンのように、さんざんと輝いているクラスがあった。「まああれが2年3組よ!!」、「あれが2の3か!」と、人々の驚嘆の声を受けつづけている。そう、あのパープリンクラス、2の3であった。

そしてその支配人、いや組長は、あのスーパードティーチャ、ピンこと、田中先生であった。今日も組長はフイーバーしながら、教室に入ると、組員に的確な指示を与えると、また組長室に去っていくのであった。さて前置きはこれの辺にして、この組の記録をひもといてみよう。（筆者はここでたばこに火をつけ一ぶくする??）

。芸人について……………あまりタレント性のある人はいないが、一人だけ、英語のM先生の息子ではないかといわれるやつが存在!、「あっそう。」「断絶だなあ!」などと、しきりにこぼす。また遠足の時、民間人のグループに入り「函館の人」を歌った人がいた。

。戦果について……………乏しいのであるが、水泳大会で学年で2位!!。出入りについて……………出入り!遠足+修学旅行、修学旅行ではとにかくトランプが流行、〃ぶたのしっぽ〃ではフライングボディアタックを見せる人がいた。また数々の芸人を生んだのである。

。打ち上げの出席率は、まあまあといったところ。

いろいろと書いてきたが、全体をみると、だんだんと団結力ができてきたようだ。とにかくこれからもっとよい組になっていくことをめわたしいのってます!!

二年四組

我が四組を紹介するのに忘れてはならない人物、それは、担任の近松淳一先生である。この程、三十五年間の教師としての功勞に対して、教育委員会からメダルをお受けになられたという、ペテラン先生である。その父親のような包容力と厳しさとをもって、クラスに家庭のような雰囲気を与えて下さるのである。

しかし、クラスは、その影響があまりないようである。家庭的な、なごやかな雰囲気などは、どこにもみあたらない。

生徒どうしの断絶と言えば、大げさすぎるが、とにかく完全にグループに分かれている。そのためか、不思議なことに、何度席替えをしても同じメンバーが、かたまっているのである。だから授業中もにぎやかで、桑原先生曰く「このクラスは、授業中だれも寝ている者はいないけれど、あまりにも元氣すぎる。」というような様子だ。一方勉強の方はといえば、これもあまり思わしくないようである。我担任の教科である日本史も、先生が教えておられるクラスの中でも悪い方のようにいつも先生は、なげいておられるのである。

しかし、二年四組は、校内球技大会や、体育大会、コーラス大会では、いつも優勝候補にあげられている。結果もまずまずの成績。スポーツ万能選手がそろっているのである。体育大会では、自分達でも驚くほど一致団結して、準優勝を勝ち得たのである。この時、クラスの和がで上がったように思ったのであるが……。

これを読まれる皆さんは、あまり理想的なクラスではないと思われるだろうがこういうクラスでも住めば都と筆者は思っているのである。

二年五組

実に烏滸な事であるが敢えて書く。筆者の独断と偏見とを以てすると我がクラスは、実に良いクラスだ。と云うのも、朱に交われれば赤く成ると云うから、四月以来此地にとつぷりと漬っている私に斯う思われても当然だ。しかし唯、云えるのは、平穩で穩便な我がクラスの雰囲気は誰にとっても居心地が良いであろうと云う事だ。毒々しさや棘々しさが無い。不埒な人間も天与の才器を持った人間も居無い様だ。平安無為な人間の集まりだ。けれども平安無為と見えるのは外面のみであって、其の根底には強力な団結力と迫力とが満ち溢れている。此の潜在的な強靱な「力」は、何か事が起こると俄に表面化する。外界からの刺激に敏感に反応して口頃は白けきっているかに見えるクラスの形相が忽焉として緊張感を増し活氣が満ちて来る。就中修学旅行の時には此れ等の性質が最大限に發揮された。我が五組は他のクラスに比類無く終始熱狂的であつたと思われる。我がクラスは最も思い出深い旅行をしたであらう。

しかし事が済むと颯と件の冷淡さを回復する。其れは、ひしひしとした沈着さだ。そして又平安無為な日々が続くのだ。永劫未來へ続いて行きそうな、そんな平凡ではあるが着実な時の流れが有る。しかし此れが久遠の彼方へ続く筈もない。間も無く春が来れば我が五組の五組としての生命は尽きる。其の惜別は測り知れない。

譯々となるが我がクラスは、その構成員の誰もが愛し、其れが故に測り尽せない程の「力」を潜在的に有している。何と素晴らしいクラスだろう。其れでは最後に、五組の面々の明日の為に方歳ノ

(担任、国語科杉野としる先生に敬意を表し謹んで記す。)

二年六組

別館二階の長い廊下を通り抜けると、そこに二一六の教室がある。二年の教室では、この教室へ行くのに最も多くの時間と労力を要するのだ。ではまず、我々が師、中村良一先生を紹介しよう。「数学の鬼」というほどでもないが、非常に研究熱心で、授業でもその熱意がよく表われている。又、健脚の持主で、我々に勝るとも劣らない。最近、子供もできて、大変はりきっておられる。一口で言えば「熱血教師」というところ。ところで我が六組をよく知ってもらうには、授業の様子を見ていただくのが一番だと思うので、以下は各科目について一言記すことにする。「現国」広瀬先生の豊富な話題でいつも爆笑。「古典・漢文」説明がうまく、みんなを知らない内に熱中させてしまう。やはり年の功か!?「日本史」今西先生と我がクラスの芸人とのやりとりがみもの。「世界史」とても静か。みんな何をしているのかわからない時間。「R」予習が励行され、なかなか真面目。「G」筆者が最もユニーク（この語は意味深長ですゾ）だと思ふ増山先生。一日に一ページも進まないのが難点であるが、さすがと思ふ一面もあり。「物理」ノートをとるのに必死。「化学」一番安心できる(?)時間。「数学」さすがに担任の授業とあってみんなの目は殺気だっている。まさに「六組が燃えてござる」

まだまだ語りたいことはつきないが、とにかく二一六はど一人一人の気心が知れたクラスはないのである。

最後に「我が栄光の六組は永遠に不滅です!!」

二年七組

二年七組の教室は、はじめて大手前に来た人なら「なんでこんなところに教室があるねん。」と思われるであろう金魚鉢にあります。この教室、三面に窓があるので夏は比較的（あくまで比較的）涼しく、冬は陽がぼかぼかとあたって非常に眠たい。否、非常に授業に集中しやすい教室であります。

七組の特徴というと、まず第一にまとまりに欠けているということがあげられます。その結果、コーラス大会一次予選を二年生の組でただ一つ落選（筆者などは、他の君のやつらにさんざんいやみをいわれたものです。）しかしその後これではいかんという気分が高まり、「行事と勉強とは、はっきりと区別して諸君らは……。」という某先生のお言葉を笑いでごまかして、文化祭・体育大会などの前には、たくさんの方が遅くまで残って、中には家に帰ってからも、次の日の授業のことを忘れて準備に専念する人もでてきました。しかしクラス全体が一つになって燃えあがるというふうにはいきませんでした。だからバレーボール大会では、もうちょっとというところまではいきましたが賞状はもらえず、体育大会にいたっては競技、応援の部ともにおしくも四位でありました。

それから七組の最大の長所（最大の短所だという声もあり）は、テストでのクラスの平均点が高いということで、来年の（人によっては二年後三年後）の大学入試では、没落しつつある大手前をささえしていく原動力となっていく、また将来の日本を背おっていく大黒柱になるかもしれません。最後に、二年七組ばんざーい。

二年八組

〃二年八組について述べよ〃これは、どんな入試問題よりもむづかしい問題です。なぜなら、我クラスは絶えず変化しているからです。そんな我クラスについて、科学的に分析してみると、我クラスは「協力分子」と「非協力分子」で構成されていて、協力分子は言うまでもなく、我クラスの非協力分子は、とても頼もしい分子なのです。この非協力分子が協力分子に転じた時、それは、どんな協力分子よりも頼もしいものとなり、その協力分子と非協力分子とが結合したとき、巨大なエネルギーをもつのです。その良い例が、コーラス大会です。首に輝く蝶ネクタイノみごとに仕留めたアイデア賞ノ（これがコーラスに対する賞なのか、蝶ネクタイに対する賞なのか今だにはつきりしません。）又、輝く水泳大会二位ノ体育祭予行練習のみでの優勝。（この意味は、わかる人にはわかるのですが……。）後に某映画会社に盗作された（と勝手に思っている）「帰らざる日々」の文化祭での上映などです。そして我々は、二年八組の核であり、クラス内に和やかな雰囲気撒き散らして下さり、又、真実よりも物語性を重視した広瀬風語り口調で、その单元への興味を沸き起こさせて下さる広瀬先生のもとで、我二年八組の約四ヶ月の余命を我々なりに精一杯生き抜いて、いつかきっと、最初の問題の解答を見つけだすでしょう。

二年九組

〃おはようございます。毎度御乗車ありがとうございます。今年

もお務め御苦勞様でございます。次に入ります列車は、文化祭から修学旅行、三年へと向かう列車でございます。危険ですから白線内にてお待ち下さい。列車が入ります。列車にご注意下さい〃

四月、音楽室の真下、家庭科調理室の真上というすばらしい条件の教室に二年九組は誕生した。列車はトンネルを走る。理科棟の工事で昼なお暗い教室である。上の音楽室からBGMが流れてくる。そして、その音楽が時として我が教室に笑いをもたらす。音楽選択の皆様の美声（？）はすべてきかれています。御用心を！

この列車の乗客の特徴と言えば、活発さがあること。大部分の人がクラブに汗を流し、自治会の仕事をしている人もいます。この活発さが、この列車の乗客の長所であり、短所であるといえるでしょう。活発といえば、このクラスの遊び時間は、お祭りです。五日並べ、ウィンクキラー・大相撲体育祭場所と数々の遊びは流行しました。今は〇〇〇の全盛期、机を開んで元気のいい叫び声が教室にこだまします。勉強だけでなく（？）遊びもするという一面です。

忘れてならないのが、バスケットボール大会、決勝に残り、惜しくも同点決勝で敗れましたが、歴史に残る好ゲームでした。

ラストに我が列車の運転手を紹介しましょう。その名も高き、上総先生です。いつも笑顔で、楽しい先生です。この先生の教える物理は、まさに「楽しい物理」だと思えます。楽しい物理に楽しいクラス。列車は想い出と希望を満載して、今日も走ります。

二年十組

読者諸君。私は今、非常に苦しんでいる。何故なら、十組という

奇怪極まるクラスを、常識有る諸君等に語るなどという事は、これ正にできぬ相談というものである。ところが、その大役、案の定私のところに転がり込んで来てしまったのだから。

さて、嘆いてみても、締め切りが真近に迫っているので、恐れながら、ひと通りのクラス紹介だけはさせて頂くことにする。

我輩すべき十組は、男子二十三名、女子二十二名と厳格でしかし情深い担任の香川氏とで構成されているのだが、これが何とも愉快なクラスなのである。

まずその理由の一つに、男女仲の良い事が上げられるであろう。その熱熱ぶりは、時に先生方の悩みの種となる程で、多少反省すべき面もあるが、実に微笑ましい光景ではないだろうか。(とは言うものの、世の中、必ず例外はつきものである事をお忘れなく。)

次に、我々は早樂的であり且つ、行動的である。従って、常に何かを楽しんでいないではいけないのだ。そして、その凄まじさには惨憺たるものがある。のだそうだが、どうも我々十組の連中にはよく解らないのだ。何しろ、我等アドベンチャーは、満足するという事を知らないのであるから……。

最後になったが、我等十組のすばらしさは、その個性の豊かさとそれを尊重し合うクラス全体の雰囲気にある。己を損う事無く、人に学ぶ。これこそ十組精神の表われなのである。我々は、いつまでもこの精神を忘れず、一步一步確実に歩むのであろう。

三年一組

我輩がこのクラスに潜入してから、早くも九ヶ月が経過しよう

としている。我がクラスは、担任中塚五郎先生、男子二十九名、女子十三名の言わずと知れた理系クラスである。過去の業績を振り返ってみることにしよう。まず、球技大会・水泳大会は、いかにも二年生らしい慎しさを以て悉く敗退し、文化祭では「世紀最大のクイズ」と銘打って、持前のチームワークで場内全体を静まり返らし、コーラス大会においては、他組のおかげで事実上の二位を勝ち取り、運動会では十五位という、大手前高校三年生としては、誠に平均的なクラスであった。また、遅刻・欠課等は群を抜き、細身の丘郎先生をたいへん困らせる一面もあった。(この話題には、我輩も多大に関与しているので、多くは慎しもう。)雰囲気としては、K内閣の下に、やる人はやる、サボる人はサボると言ったところであろう。しかし、春期校外教授の岡山公園で、何を思ったのか、この四十二人のおじさんとおばさん。周回の白い目も顧みず、バレーボールを始めたのである。それに、秋期校外教授の〇〇における、膨大な出席率と盛り上げは、将来の同窓会安泰を示すに充分であろう。

そこで一つ。全国に散らばらんとする一組諸君よ、共通二次も何のその、諸君たちには大阪人魂が潜んでおるのだ。日本中の人間に、大阪県人のせこさとド根性を見せてやろうではないか。そして、歓喜に満ちた春を迎えられることを心からお祈りする。

最後に、クラス紹介というものが、マンネリ化の一途を辿っていることを解りながら、何らの打開策も浮ばず、このような陳腐な文章を書いてしまった我輩を許して頂きたい。後輩諸氏の健闘を期待する。

全員、中塚五郎先生に向って、最敬礼!!

三年二組

ゆるぎなき力の象徴 M 女史頂点に形成されるわがボクコリ軍団は、少数女子の個性が故のキンキンムードを男子の紳士的サポートで緩和している不思議に調和のとれたクラスなのです。まずその輝しき功績をたどってみますと、文化祭では名画「墮落の構造」において青春を謳歌する高三生の心髄に迫り、三年担当の諸先生の隠れた演技をフルに引き出す大仕事を果たし（わかってるってば会長ノ誰にも言わないよ。試写の時より大幅にトイレのシーンが増えてたことなんか……）また体育祭では学校一のデカ旗とマクドナルド帽に水兵ルックの鮮やかなコントラストでフィールドを飾り、親衛隊を引きつけた我らがボクコリの活躍につられてか自然と得点も増えたりなんかして、ついに校内大会では固守していたBOOBYの座を明け渡す結果となったのです。さて日常生活はと申しますとこれがまた、身体中に青アザつくってフルーツバスケットに興じ、毎回高出席率の二次会では異様に瞳を光らせて、ヨダレを拭いつつ(?)結婚論を戦わせ、2学期半ばを過ぎるとあせりが転じてか同性愛に走る者多数……だったりするわけです。もちろんこれはほんの一面にすぎないのですが、つのる不安はアイソ笑いで隠しつつ、お勉強のハナシはひきつる笑いで避けながら半ば開き直りの精神で日々を送ってしまう2組の面々なのです。それでは最後に留学生O嬢（通称ゴリ）を決死の覚悟で世話された哀愁の新郎S氏並びに敏腕調教師I氏に心からの称賛と、頼れるオヤジ様広田恒一先生にあふれんばかりの感謝の意を込めて拍手ノそれから3ノ2のみんなに乾杯ノ

三年三組

昭和五十三年度激動の大手前リーグヘナントレースもいよいよ大詰め。知将佐野監督率いる我等が3組級団「佐野バツファローズ」は、対戦成績365試合爆笑一杯御裾分、笑率120%で堂々の首位、V1目指してひた走るのであります。そしてこれは、全力投球で級団を守り、戦い抜いた3組戦士達の、栄光（狂乱）の物語なのです。

新チーム結成後最初の行事は遠足。お互いに慣れなせいか、バレーボールに興じる者あれば、野球を始め、打球が一般観客に見事に命中、あやうく場外乱闘に巻き込まれそうになる者数名を確認。そして☆校内バレーボール大会出場（●栄勝：優勝男子6人制B）●辛勝：準優勝男子9人制A●絶対嘘で勝：準々優勝男子9人制B）☆文化祭職業訓練兼用露店開店（各人たくましく商魂を暴露。卒業後の自活の自信を深め、数年後何処かの祭での再会を約束したとかしないとか。最後に、志半ばにして非業の死を遂げた金魚に黙祷!!）などの、こうした一連の行事への参加（N次会を含みN無限大）と、時の流れがもたらした絶妙のチームワークは、今シーズン後半戦の天王山、体育祭応援優勝に輝く、大阪城のアベックと官庁街を熱狂と興奮の坩堝に叩き込んだ3組コールの大合唱、さらには忘れもしない10月27日、豪雨を押して開催された戸あんとときや土砂降り雨の中野球大会（おかげで風邪ひいたわ。クシュン!!御免なさい。）でのガッツブレーの連続（人はこれを狂気という―百恵の新番組）と、大手前に、3組大旋風を巻き起こす。懸命に学び、そして懸命に遊ぶ。燃える―そして笑う。軍団。これが3組なのです。

三年四組

優秀かつ著名な紳士淑女の輩出地3ノ4の横顔

☆大盛況ノ喫茶「天満座」——ラーメンマークに揺れた一日——

一九七八年六月十八日快晴、3ノ4にとって初めての大事事は、ここに幕明けを見た。大手前史上初？の絢爛豪華な中華風装飾のためか、開店早々店内は予想に反し超満員。砂糖無しレスカ出現、黙って飲んでくれた人に今ここで謝ります。男子軍大奮闘、○君のウエイターぶり天下一品ノ水シブキも何のそで黙々と食器を洗い続けた人二人有り、女子軍負けソー。ヤミ取り引き横行、各自クラブの者を招き大値引きで売り上げ激減。それにしても忙しかった。

☆決行ノ雨中のラグビー風ソフトボール——ファイトブレ——続出——

一九七八年十月二十七日雨日R、日頃のストレス解消を夢見てか、朝からみんなやる気満々、小雨がちの外を眺めつつやるやらないの大論争。カゼひきをも恐れず、ただ汗と泥とを求め、男子約30人が豪雨の大阪城へ。女子数人も応援に。まさに受験地獄に対するささやかな抵抗か。あっぱれ、湖と化したグラウンドにラグビーまがい突込む人数、滑べる人転がる人多数。これこそ野性の証明とある人言う。円陣組まれ、関の声も上がる。かくして大騒ぎのうちに試合はなぜかドローに終わり、両チームは礼儀正しく終了の挨拶をし、校歌をわめきつつ、爆笑のうちに解散したのであった。

☆最後に、この救い難き集団3ノ4を誠意・忍耐・愛情・寛容を持って指導下さった担任平口先生、諸先生方、どうもありがとうございました。来年度もよろしく……と言いたくないなあ。

三年五組

さいところ ある人 我にこの原稿を頼みしに我は単純なるをもつて、いと喜びて引き受けつ。されど、友と語りて笑える時にも、学を修めたる時にも、この原稿をば、いかにせむと思ひて、心を休めたる時こそ、知らぬ。我にこれを頼みたるはエリスなりき。おおエリス……。冗談はこれくらいにして、まず何から話そうかに——

大手前に入学して早や三年。まさに、光陰矢のごとし。本当に、良い学校である。春の遠足での出来事（船の中で他校と一緒だった）「おまえの学校誰が一番や」「そやな、学科によってちゃうけど」「学科？阿呆、けんかの事聞いてんのや」「そんな一度もした事ないから知らんわ」「ひえー」という具合で、大手前という温室を痛切に、感じた。さて、我が三年五組は理系である。したがって女子が少ない。しかし、その少なさを感じさせない。何故か？それは、げらの女子Tさんの存在である。その笑い方のダイナミックなこと。噂では、一年の半分は笑っているとか。その他の女子も、皆活発で美しい（だろう）。クラス全体としては筆者以外は皆秀才である。他人に、落・て・ま・え（人手前との掛け詞やに）と言われても、進学する。そのためにも、皆頑張っている。時々、襲われる異性への憧れも振り捨てて……これを『舞姫』では「検束に慣れたる勉強力」という。なんちゃって。（影の声↓もうやめ！）

最後に、藤田先生（石野真子のお姉さん）には何かと迷惑をかけた。すみません。我々老兵は今や去るのみ。でも将来は、互いに助けあい励ましあって生きてゆきたい、とクラス一同 思っている。

三年六組

僕達のクラスの特徴は、岡先生を筆頭に、各個人の性格の特異性と多様性といったところでしょうか。皆が各々違った、非常におもしろい性格を持っているのです。それ故クラスの利害が一定方向に流れず、まとまりにくいという欠点もあるのです。が授業中に起る多彩な笑いには大いにひかれるところがあります。分析してみると……まず男子です。多様性の中にも二つの方向があります。それらはクラスに対する「体制」「反体制」そして「中立」とでも名付けられるでしょうか。クラスをよりよい方向へ統一していこうとする「体制」派。それに反発し自分達の思うようなクラス作りを試みていたが、最近ではその実現の不可能さを認め多少厭世感に陥っている「反体制」派、そしてその表には見えない対立に対して、自分達には全く関係がないように振舞ってはいるが、実際には最も鋭い視線を送っている「中立派」。それらが心の底ではそれぞれに対して大きな反感？を持ちながら、表面的には協調しあっている微妙な関係、それはそれは非常におもしろいものです。女子についてはどうかというと、「中立派」が大部分であるような気がします。そして「体制」派支持が少々、「反体制」派がごくわずかに寂しい気がします。でも、がり勉、点取り虫的な人がいないのが、かすかなる救いであるように思われます。とにかく愉快なクラスです。そしてけっこう、うまくやっていけるのです。クラスにはこれ位の対立は必要なのではないでしょうか。そして、卒業後、同窓会が何かの時、こんな事を心を割って話しあえたなら、最高ののです。

三年七組

「おはようございます」朝のすがすがしいたたずまい。たたみずまいの彼は、このクラスの会長さん。少し遅く遅刻の常習犯？けど、この先生やさしいのネ。本鈴なっからきてもいいのだぞ。ノ。とっつあんて言うのだぞ。またの名を「中川さん」もっともこれが本名だけども。

あっそうそう、会長さんのことだったネ。ほんとクラスの象徴だね。ナンチャッチ。その会長さんを中心に、われらのクラス大きく成長しているのです。まず暗れのコーラス大会の優勝。毎日毎日会長K君は指揮者としてがんばって、みんなもそれに服従さ。あのバレーボール大会。素晴らしいかったではないか。おとなしい。○子さんも地面も震わす回転レシーブ。男子も、あの時ががんばったのだけど。そこはやっぱり文系男子……。いわゆる文系路線を……。

けど、負けず嫌いの我がクラス。見事に水泳大会男女混合リレー決勝進出!! 結果は……。けど、いいんだ。ぼくらは負けないぞ。明日があるんだ。先は明るい。なっ、みんなノ。

思えば四月「あの子、陰険ヤネ。けどもうそのわずらわしさも慣れてしまった。いや違う。みんな大きくなったのだ。背も心も。みんなの心が、いっしょになったんだもん。数学でみんながなんで悪い顔とちがうで心やでノ。大切なのは人と人の心のつながりさ。そんなことがわかったのも、このクラス。傲慢のクラスさ。もうすぐ、みんな旅立つんだ。さびしい……。みんな、大声で叫ぼう。

「ありがとう大手下前。」 by pink gentleman

三年九組

授業中、スプリングの原稿依頼に占しむ私の手もとに一枚の紙切れが回ってきた。短信―本日男子バスケット一回戦。はつきり言つて戦力的には大いに劣る。しかし最後の球技大会　精一杯がんばつて我々が今西師を胴上げしよう。―これを読んで私はやった、と思つた。これでスプリングの締切りを二十日間も延ばしてもらつたかゝがあつたわ。なぜなら私は敗戦の胴上げを恰好の材料にしようと考えたから、何も、九組男子が「運痴」の集まりというわけではない。ちゃんとバレーボール大会では（セコク九人制に総力をかけて）

優勝しているし、体育大会でもいくつか（リクレーション種目）入賞している。脚力だって毎日のランニング通学によって、相当ついているだろう。なのに私の頭を一瞬よぎったのは、あの平泳ぎリレーのいまわしい殿方達の姿であった。球技会ごとに優勝候補にあげられた九組女子でさえ、無冠の女王に終わったのだから、ましてや選手平均身長165センチにも満たない男子が……だから、私の期待も

当然である。だのに……何と勝っちゃったんです。今西師が甬に舞う。勝利の歓喜と共に、私？私もスプリングなんてどうでもいいわって思いながら輪の中へ。今の班ノートが横行し、生徒総会には三年唯一クラス全員出席し、ソフトボールを五時まで行い。歩く時

にはアゴ前方90°、話す時にはクビ左方30°の角度のかわら版編集長が担任する二ノ九、我らのもとに栄光あれ。

随 想

「純粹に生きた 吉田松陰」

大 倉 清 校長先生

明治維新推進の原動力となった吉田松陰は戦時中は神格化されすぎていたが最近是個を重んじた松下村塾の教育者として再評価されている。二十才で刑死した若き日の彼の一端にふれてみたい。

松陰の人間形成の過程において先ず特筆さるべきことは両親の生活態度である。二十六石どりの下級武士である父杉白合之助は朝は暗いうちから草を刈り畑を耕し夜は夜なべ仕事の縄をないわらじを作り、武士というよりは貧農に近い状態であった。ともすれば暗くなりがちな杉家を支えたのは母お滝であり家に笑いと明るさを失わないように努めた様子は次の歌からもうかがわれる。

やぶれ蚊帳はどめでたきものはなし

吊る（鶴）と蚊め（亀）が舞い下る

松陰（幼名虎之助）は朝は父とともに山や畑へ出かけ草を刈りながら講ずる父の「論語」を口うつしに覚え、夜は縄をないながら説く父の「孟子」を学んだ。六才の時叔父吉田大助が亡くなったのでその家を嗣ぐと同時に父のもとをはなれて叔父玉木文之進（乃木希典の叔父にも当る）の家塾に学びきびしくつけられた。彼の学は次第に進み十五才の正月藩主毛利敬親や重臣たちの前で「御講書始め」の兵学の講義をして面目を施し、二十才にして藩中並ぶ者のな

い学者になった。しかし彼は藩主の師範となるためには日本一の学者にならなければならないと思い当時の文明の窓長崎への遊学を願い出ると、藩主は松陰を白藩の宝と称し旅費を与えて希望を適えさせている。肥前平戸で山鹿流の兵学と陽明学を学び滞在五十二日間に実に八十冊の古書を読破している。それも熟読して要点を書き抜き読後の感想をつけて翌朝返却した事の次第は彼の旅日記に詳しい。宿の女中が知らせる風呂も夕食も耳に入らず夜が明けかかって始めて冷えた食事をしたと記している。

二十一才になると藩主の参勤に従って念願の江戸出府をした。この頃その名を寅次郎と改め、故郷の松本村からとって松陰と号した。時あたかも嘉永六年（一八五三年）ペリーが浦賀に来航し時を同うしてブチャーチンも長崎に入港したので世情は騒然となった。翌年ペリーが神奈川条約を結ぶため再来した時天下の憂いを人に先立って憂うのがまことの士であると鎖国時代の国禁を破り死を決して海外渡航を企てたのは彼の二十五才のことであった。事は破れて下田から江戸伝馬町の獄に押送されたがその途中上野泉岳寺の前を通り過ぎる時赤穂義士の霊に手向けて歌う。

かくすればかくなるものと知りながら 已むに已まれぬ大和魂

松陰二十五才の渡航失敗までが試練の多い前半生であり人間が誰でもたどる動揺屈折の道であるが、失敗後下獄して死に至るまでの五年間は高さと厳しさにおいて不動の巨大なスフィンクスであった。

判決の結果幕府も士を惜んだのか罪は意外にも軽く在藩勤慎を命ぜられた。西郷南洲はよく言った。「世の中に金も名誉も生命もいらぬ奴ほど始末に困るものはない。しかしそれでなければほんとうの大事は語るに足りない」と。松陰は帰国後その号を「二十一回猛士

と称した。「獄中、夢の中に神人が現れて自分の一枚の札を与えた。見ると二十一回猛士と書いてある。夢がさめてよくよく考えると自分は杉氏の生れで吉田家を継いだ。杉と吉田を分析すると二十一回となる。(杉川十八三、吉田川十一口十口)又寅年の生れである寅次郎は気の弱さに負けず虎の勇猛さを学ばなければならないという啓示であるに違いない。故にこれから二十一回猛士と名乗り虎のように猛然と勇気を奮い起さなければならない」と決意している。

松陰の偉大さはこの謹慎中の松下村塾における教育者としての生き方であった。弟子の心を常にひきつけ、それぞれの天分を悟らせて自分でやる気にさえすれば青年は伸びるだけ伸びていくものだ。個性尊重・人間尊重の教育に徹した。その個性尊重は西洋的な個人主義とは異質のものであり、日本の土壌に根ざした民族のエネルギーを爆発させ国家の危機を打開するという論理を自己に実践することであった。門下生百余名のうち三傑と称されるものは桂小五郎(木戸孝允)、高杉晋作、久坂玄瑞であり、明治の元勳となった者は公爵伊藤博文、公爵山県有朋、伯爵山田顕義、子爵品川弥二郎等である。しかし松下村塾の生活も僅か二年半にすぎず井伊直弼が大老になると世にいう安政大獄で江戸伝馬町の獄へ再送され三十才の若さで刑死した。獄中故郷の玉本文之進あての別離の手紙に

親思う心にまさる親心 今日のおとずれ何と聞くらん
又死に直面して書き残した留魂録の冒頭に

身はたとえ武蔵の野辺に朽ちぬとも とどめおかまし大和魂

人生とは自分を探求して死まで歩く旅であるとすれば、松陰はその旅を三十年に圧縮して凄じいまでに純粋な美しい生涯を築いてみ

せた。自分をいつわらないその歩みの素晴らしさに当時の若者たちは惜しめない共感をささげた。松陰が「松下陋村なりといえども暫つて神国の幹となさん」と松下村塾の壁に書きつけたとおりその幹は明治維新の支柱に育っていった。

昨日、今日、明日

近 松 淳 一 先生

一、わが父の一片断

父は明治十年生れ、純粹のお寺育ちである。四十二才になって初めて男の子が誕生した。それが私である。ないものと思っていた子供が生れたものであるから喜びも大きかったようである。三才で母親を亡くした私を父が母親も兼ねて育ててくれた。子供の頃線病質で身体の弱かった私にメガネ肝油、小骨のある魚をすすめ、先づ健康と云う目標で育ててくれた。又オタフク風邪で四十度を越え生死の境をさまよう時に徹夜で看護してくれた父。叱られた事で印象的な事は子供達と小蛇をいじめていた私をその日は夜、食事抜きで叱責された。それ以後寺の境内にもたくさんいた蟬、蜻蛉捕りは一切しなくなった。父の心には無益な殺生を戒めると共に一はろはろと鳴く山鳥の声聞けば父かとぞ思う、母かとぞ思う「幼い時両親に早く死別した父の心の中にはこの様な気持があったように思われる。境内の草むしりを父と共にしていた時に、父があの小屋根に寝ている蛇も人間と同じで今昼寝をしているんだ。目をさましたら大きなあ

くびをするぜと。果してその通りであつたが蛇も中々可愛いものだろうと私に云つたが私には、今もつてその気持にはなれない。又或る人が私の土産として籠に入れた子鳩をくれ、父は厚く礼を述べ、その人が帰ると「鳩は山や里が故郷である。こんな籠に入れると不自由な事だ。もしお前が入れられたらどうだ。逃がしてやらんか」今もつたばかりの鳩を手離すのは惜しくて仕方がないが、しぶしぶ籠を開けてやった。鳩が羽ばたきをしながら大空を回転し乍ら何処かへ飛んで行った。何か喜んで有難うと言っているような気持で愉快だつた事を覚えてゐる。真宗の寺の事であるから報恩講と云うものがあるが、その時参加された僧侶十人程に最後に皆様のお陰で報恩講も無事終了いたしました。来年も皆様が全部揃いますか。揃つて参堂して戴き度いものと、父は挨拶し私は子供心に何か不吉な嫌な言葉と思つていたが今日此頃ではその言葉の意味が判るような気がする。父の楽しみは夕食時のたつた二杯の盃の酒であつた。今の私は悪成長して盃に二十杯は飲める。泉下で苦笑している事でしょう。大きな愛情をもつて育ててくれた父の事を此頃時々夢で見、涙ぐむ時がある。私にとって一番大きな存在であつた父の事を。「十億の人に十億の母あらんも わが母にまさる母ありなんや一晩鳥敏の歌である。みなさん御両親を大切にして下さい。」

二、孤掌鳴らしがたし

二年四組は小グループはよく纏まっているが、組全体としては纏まっていないと言われている。その通りである。小我の世界に埋没している。両手なら打ち合わせて音を出せるが片手では無理である。人間は一人では何事も出来ない。相手があつて初めて色々な事が出来る。吾々の高校生活も同じ事である。人間社会は協同体である。

だから協同して生きてゆく処に人生の喜びが感じられる。又そこには秩序づけの爲のルールも必要である。小さな二年四組のクラス、お互に信頼し、支持し、尊敬し合い、助け合つて進んで行く処に人生の意義がある。だから独善、独断、利己主義は排除しなければならぬ。小さな二年四組の協同体、一歩一歩前進して下さい。よく叱りましたが又可愛い良いクラスである。さあ前進して下さい。

三、俳句難感（最近の私の好きな句）

且先生より二年四組の俳句をいただき鑑賞しましたが、らしい句が多い。別の言葉で表現するにつき過ぎてゐる様に思います。

- (イ) 恐るべき君等の乳房夏来る
- (ロ) 父生きよ寒灯に母うしろかげ
- (ハ) 木枯の刃先のようなネクタイ締む
- (ニ) 若き師に肩たゝかれて卒業す
- (ホ) 冬耕の人かへるべき一戸見ゆ
- (ヘ) 己が嘔む数の子や耳傾けて

以上が私好みの句である

(ロ)は母親及び本人が病床の父の身を案じている状態、特に最初の五字が本当に活きているようです。(ハ)はようなと云う表現に一寸こだわるが鋭い感覚だと思ひます。(ニ)は卒業と云えば涙ばく、仰げば尊しとかを連想しますが、らしくあつて、らしくない、自分では中々創れない句と思ひます。(ホ)何ともいえず哀調を帯び如何にも師走の感じ、その年の暮れも、あとわずか。

四、創作 高校時代は教師は灯を照らすだけで、皆さんは自分の頭で物を考え、心を練り、冷静に自分自身と対話してゆく時期であり、そう云うところにこのスプリングも意義があると思ひます。学ぶ事の苦しみと共に楽しみを味わつて戴き度いものである。そして一日

一日を大切にして下さい。芭蕉は「今日の発句は今日の辞世じゃ。明日の発句は明日の辞世じゃ」と言っています。そして毎日毎日が創作と言う気持で進むと明日と云う日は必ず光明があると信じています。さあ 皆さん。共に頑張りましょう。

散歩道

石川 承紀 先生

夏の終りから秋にかけて、上町筋を歩いてみた。学校から上本町六丁目までの三キロ程を、四十五分もかけて歩く。大きな街筋としては歩きやすい方だろう。四つ橋の厚生年金会館まで歩いてみたことがあるが、東西の道はひどく歩きにくい。信号が多いし、心をなごませてくれるようなものにも出合わない。その点、上町台地の南北の道には、ふと立ち止まってみたくなるものが多い。

大阪城にしても、大手前に来るまでは、鉄筋コンクリートの城に何程のことがあるかと思っていた。ところが、西之丸庭園を知り、本をぶら下げて行くようになってからはまったく考えが変わってしまった。桜の頃に花吹雪を浴びて、あるいは、いちようの葉の色が見るたびにあざやかさを増してゆくあたりで、マノン・レスコーというような、遠い国の、遠い昔の物語りを読んでいると、教壇に立つようになってから初めて得た、貴重な贅沢な時間のように思えてくる。本を読んでいると、私が座っている目の前に、鳩の羽根が一本だけくるくるくる回りながら、天の一角から降りて来ること

がある。芝生の上に落ちると、ずっと以前からそこにあったように身じろぎもしない。空を仰いで鳥の姿を捜しても、影も見えない。そんな時、庭園の一角だけが時間と空間の絆から解放された幻想の世界にあるような気がしてくる。

西の丸庭園は、私の散歩道の出発点のようなつもりでいる。

上町筋を少しはずれて、難波の宮跡の東側の筋には、面白いものが幾つかあった。文学の道とか言うそうで、誰でも知っている所のようにだったが、私には珍しく何度か歩いてみた。レンガ色の石を敷いてあって、落ち着いた気持ちのいい道だ。ブラブラ歩いているとトレパン姿の一同が駆け抜けて行く。

「先生、お帰りですか」と声をかけられて気が付くと、先程の授業で指名した生徒だった。爽やかな風が吹き渡ったように感じて、「頑張れよ」と大きな声を出した。この舗道も、大手前高校の広大な運動場の一部なのだろう。

「文学の道」には、細川ガラシャ夫人にちなむ井戸や、契沖の円珠庵などがあった。円珠庵では、土曜日毎に、国文学関係の講座のようなものがあった。時間の合う時には立ち寄って聞いてみた。若手の研究者が、幸生屋星や立原道造の詩について、十五・六人を相手に話していた。年配の人が多く、私などは一番年下のように、豈に座って聞いているといかにも上町筋にふさわしい集まりのように思えた。

西鶴や近松の墓は上本筋の西側にあった。小説を書く友人に勧められて常国寺という寺に梶井基次郎の墓を訪ねたことがある。近鉄百貨店から西へ五百米位の所にあって、建ち並んだ寺の中では、特に目立つという風ではなかった。寺はすぐ見つけたが、狭い区画

の中の千余の墓の中から梶井の墓を見つけるのに、随分時間がかかった。墓そのものもとりたてて変わった所はなく、以前は、「梶井基次郎の墓」という独立したものもなかったようだ。

上町筋のそれらの墓は皆小さく、それについて説明のあるものも少ない。道端の、気付かずに通り過ぎてしまいそうな所にふと目をやると、近松門左衛門や竹本義太夫の墓がある。寺町あたりを経めぐることによって、私に寺参りの趣味があるというのではない。殊香臭いことは苦手なたちだ。しかし、それぞれの時代の中で、自分のやりたいことを懸命にやり抜いた人達の墓の前に立つと、その人たちのたぎりたつエネルギーが伝わって来るように思える。若く逝った人も、長く活躍した人も、皆一生懸命に自分の生きざまを守っている。死んでエンマ様の前に立った時、「私はこのように生きて来ました」と報告する内容があったように思う。私はそのことを羨しく感じる。これらの場所は皆小さく、名所というには及びすぎる。しかし、そこには、彼等の長い青春が息吹いているように思える。

梶井の墓から帰る路で、「先生」と呼びかけられた。十年程も前の教え子で、今は府立丁高校で物理を教えている丁君だった。その時会ったのは偶然だったが、相談があるということで手紙をもらったりしていた。聞いてみると、大学院に行くことにしたと言う。しかも、専攻の異なる経済をやりたいという。大学院の試験にも合格していて、来年四月から勤めをやめるつもりだ。経済学については、夜間の大学に通って勉強を続けているようだ。丁君はすでに結婚していて、二人の子供もいる。奥さんは、これも私の教え子だ。また市大医学部の四回生だ。当分収入の道はない。それでも、自分



クラブ紹介

○運動系クラブ

水泳部

夏の盛りのおだるような暑さの中。文化系クラブの者でさえ、汗だくになっているさなかに、我々水泳部はすずしい水の中で楽しく泳ぎます。夏の練習は合宿まではやや苦しいが、それがすめば体力がつくので大分楽になります。とにかく夏、すずしいクラブです。

陸上部

陸上競技は常に新記録への挑戦である。そういう熱意をもった部員が集まり、日々練習に激んでいるのが陸上部だ。先輩と後輩の間に隔たりはなく、チームワークは抜群!!この明るいムードの中にあつて、各個人が自分のベストを尽くすことに青春を賭けている。

サッカー部

我がサッカー部は、怠慢クラブ・プレイボーイ軍団・練習試合に強く公式戦に弱いクラブ

などの異名を持っていて、俗にいう芸人ぞろいで笑いがたえない。戦績は14戦11勝1敗2引分け。蹴倒北陽をめざして連日ボールを蹴つとります。

ラグビー部

ONE FOR ALL、ALL FOR ONE・を合言葉に楕円のボールを追っている。それがラグビーです。顧問・OB・現役が一体となって我が部を育てています。練習の厳しさは随分ですが、白馬への合宿・セービング大公等の楽しい行事が多くあります。

柔道部

柔道部は今、人気沸騰中のクラブです。きびしい練習のため「肉体美の集団」とまでいわれています。腰痛に顔をゆがめ、道場の片隅で泣く光景を見ることが出来ます。頼れるものは自分だけの肉体のぶつかり合い、それには、道場ヘドジョー。

剣道部

夏は防具のむし暑さにも、冬は素足の冷たさにもめげず、毎日練習に励んでいるのが、剣道部であります。ユニークな部員に囲まれ

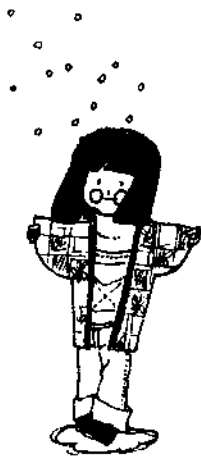
て、諸君も日本古来の伝統をうけつぐ担い手となるう。

空手道部

一般に「空手道部」などというと、いかつい顔した物騒な連中の集まり、という印象があるが、当部は無用の因習にとらわれることなく、シンプルで実戦的な空手を日ざし、少数精鋭主義でがんばっております。さあ君も空手道部で不屈の精神を養おう!

硬式野球部

我が硬式野球部は、本校の中でも特に厳しいクラブとされている。毎日、白球を追いかけてグラウンドをかけ巡る練習は生易しいものではない。だが練習後の満足感、先輩との語らいは、その日一日を充実させる原動力となる。君の青春を悔い無きものにするのは野球だ。



軟式野球部

我々軟式野球部は、楽しい雰囲気クラブです。まだ復興されてまもないのですが、皆藤井寺球場に行くことを夢んでいます。中には甲子園に行こうとしている者も居るようです。皆野球の好きな者の集まりです。野球の好きな人は、よく考えてどうぞ。

卓球部

我が卓球部は、部長中心にまとまっており、OBの方達ともつながりは深い。また個性豊かな先輩たちがそろっている。練習は台打ちと基礎練習で特に基礎練はハードなので覚悟しておいてもらいたい。では、やる気のある新人生諸君、ぜひ我が卓球部へ！

硬式テニス部

コートでは、誰でも一人一人きり！個人プレーであるテニスこそ、我を知り、我に勝つ根性をつけるクラブです。二日に一度しかコートは使えないが充実した練習で克服。個性あふれ、そしてトランプ狂の先輩達が、青春を何かに賭けたい君を、楽しみにしている。

軟式テニス部

わが軟式テニス部は、練習場所が口ごとにコート、大阪城と変わる。コートの日は、昼練もあり、大阪城では、ランニングをしている。部員は、個性豊かな者が多く、クラブ後の雑談など、楽しい雰囲気につつまれ、みんなが一つに団結している。

男子バレー部

大手前高校に入学、男子バレー部に入部。そして今まで幾多の試練を乗り越えて白球の夢を追いつけてきた。夏季練習、合宿、文字通り汗と涙で乗り越えた時の感激。我々男子バレー部はともに喜び、ともに悩み、そうして個々の人格を高めていく。高校生活の醍醐味というものを知っているクラブである。

男子バスケットボール部

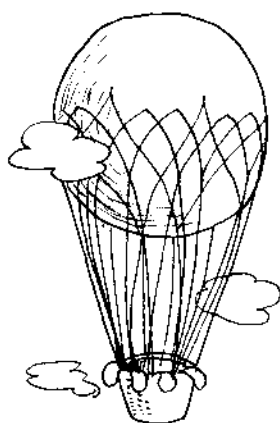
大手前の中で唯一の勝つためのクラブです。顧問やコーチは全国大会級で夏の大会では府下ベスト16で現在は近畿大会めざして、日夜練習に励んでおります。又部員数もふえましてマネージャーまでふえるというこの現象にもしかして今年は……と陰ではよい噂も。

女子バスケットボール部

部員は、全部で16名マネージャー2名という今のクラブ状態です。練習の激しいクラブとして知られていて、つらいことも多いのですがそれだけにクラブの団結は固く守っています。

登山部

わが登山部は、全行程五十六キロの六甲縦走や夏のアルプス縦走などの山行において、常に自分を死に直面させることによって、どんな苦しい事にも耐え抜く気力と根性を身につけることを目標としています。
(そんなええもんか)



○文化系クラブ

理化学研究部

活動分野は科学一般(化学・電気・天文気象)と多彩ですが、何かするとなるとどこからともなく部員が集まるのが「理研」である。また合宿(流星観測)やニュートン祭など年間行事も多い。現在伝統ある理研を建て直すため、固い意志のある部員募集中!!

ウ。どうぞおいでやすですえー。

音楽部コーラス班

コーラスとは名ばかりのおよそ合唱とはほど遠いことを毎日飽きもせずに行っています。ようするに授業中のうさを大声を出して忘れているのです。とにかく一度見学に来て下さい。そしてこれなら充分耐えて生きていけると確信したら、ぜひ入部して下さいませ。

生物部

みなさん、生物部は今、着実に活動が続いています。大阪城における、エビ・ヨシノボリの採集、プラナリアの採集、プラナリア・イモリの再生実験など。その他多くの活動予定があります。これから発展させるべく努力いたしますのでよろしくお願い致します。

文芸部

この「傾いた天井」一家は、正に風前の灯。全てが奇異に満ちた部屋で、極平凡なる者たちが、原稿用紙と戯れているのです。

。入部資格 読み書きができること
。活動場所 主に部屋(調理室付近)
。合言葉 「原稿書いた?」「まだ」

美術部

バザーをやって、紙芝居して、油絵かいた文化祭。えのぐだらけのエプロン姿で連日食堂へ行き、尊敬のまなざしで見られた夏休み。高校展、文化クラブ発表会。部誌も三冊目になり、あとはもう少し男子部員を増やしたいというのがささやかな望みなのです。

映画研究部

わが映研は普段は怠慢ですが文化祭など大きな行事がある度に目覚める特異なクラブです。本館の隅の暗くほこりっぽい部屋で映画論など奏で、又、全大阪映研連合というおおげさな名前の会にも所属して校外での活動もやっております。新入部員、大募集中!

書道部

書を愛する女の子が七人集まって、彼女らを優しく見守る先生によって成立しているクラブです。毎週月水金の放課後に作法室の中で笑いに満ちて活動しています。男子一年生が皆無ですので、だれか入部してがんばってみませんか?

素適な子と先輩がいっぱいよ!!

音楽部軽音班

我が音楽部軽音班は毎週金・土曜に音楽室でドンガラガチャと、どこかい音をたて、第2の宮川左近ショー、かしまし娘をめざして、日夜がんばっているのです。さあ、君も輝く大手前の星となるように、軽音でガンバリ

E S S

現在部員数8名。クラブ長屋の狭い・室でそれでもたくましく活動しています。文化祭、文化系クラブ発表会と発表の場は少ないですが、大阪城での会話実施訓練、アメリカ国語の学習、ディスカッション等の日常活動有り。英語の好きな方、今すぐESSへ!!

地理歴史研究部

わが地歴部は現在八人の部員からなっています。部室は本館三階書道教室横のいしえの間、観音開きの大きな部屋が目印です。主な活動は日本の地理・歴史・文化を独断と偏見を交えつつ研究・発表する事です。興味の
ある方、おひまな方、部室へどうぞ！

演劇部

夢多き人へー演劇部に入って、自分以外の人生を演じてみませんか？
演劇に興味のある人へーもちろん演劇部に入って、いっしょにやりましょう！
めだちたがりの人へー演劇部に入って、おもしろいめだちましょう！

創作ダンス同好会

我々、創作ダンス同好会は、現在一年生六人の小世帯です。練習場所は道場の片すみですが、剣道部の騒音にもめげず、柔道部には御迷惑をおかけしながら、ひたすら練習に励んでいます！？目下、新入部員（ついでにBFも）募集中です！！

放送部

放送部は校内放送ができない……このようなアホな矛盾が存在するとともに、放送部は存在している。なぜか……文化祭において活躍するから。体育祭において場内放送を担当しているから。そして、何よりも、放送部員が居るからであります。

（同好会）

ブラスバンド同好会

クラブ長屋のヒーロー、静寂の敵、我らが吹奏楽同好会は、終鈴が鳴るや否やHR、長屋を経て新館へ向う神風となり、新館では、金属音の調和を追求し続け、己の限界を知りつつも希望を抱き、挫折、再起を繰り返す日々を送る会である。興味ある方おいでやす。

SF同好会

常に夢とロマンを追い求める集まり、これがSF同好会です。機関紙「シャンブロー」の発刊はか多彩！（かな？）SFに興味のある方大歓迎！あなたもSF同好会で、未来を夢みませんか？ついでに痴性と狂養も身につけよう。

新聞部

ようやく、文明の灯がともった大手前北嶺頭頂の部屋で、風と闘い埃れまみれ、企画編集にいそしむ、怠慢と情熱が入り混った、誇り高き人間の群。インクで汚れた手が、我等の勲章。

落語研究会

人間、笑っている時というのが、人生において最もしあわせな一瞬です。その最高のしあわせを与えることができるものそれが落語です。「きつと君をしあわせにしてみせる。」プロボーズの文句ではありません。これが落研のモットーです。

鉄道研究同好会

数々の校外活動ではまわりの人々に「好きなやなあと」という目で見られながらも日夜東奔西走しています。活躍中の写真班に続き、模型班・録音班も計画中で、女子部員の多さでは他校に類を見ません。ただ一年女子がいらないのが悩みのひとつです。

先生紹介

永井先生



大手前高校でも影の薄い存在と思われがちな先生ですが、行事を通して生徒のために大きな努力をされてこられました。と言うとちよと大げさな表現になりましたが、現に前回の文化祭や体育大会においても、毎日夜遅くまで自治会の役員とともに残られ、多くの問題と取り組まれておられました。

さて、日常の先生の様子などを少しあげておきましょう。

まず服装（冬）についてですが、三ツ揃えやスーツなどはめったに着ておられません。ネクタイはよくしめておられますが、その上からいつも同じ（といっても年中同じというわけではありませんが）ジャケット風の上着を着ておられます。そういった姿で、辞書と教科書を片手に（遅れましたが、永井先生は英語を担当されております。）、何を考えておられるのか、よく下を向いて廊下を歩いているらしいです。授業中はあまり怒りになりませんが、先生が教壇に立たれても生徒がざわざわしていると、突然、「ジャカーン」と大声で怒鳴られます。すると次の瞬間、教室がシーン？ それか

ら、生徒をあてられるとき、いつも決ってどの列からあてるか大変迷われ、真剣に考え込まれます。まだまだ先生について書たりませんので、あとは自分の目で確かめて下さい。

増山先生



増山先生は、実に個性豊かな先生です。初めて授業を受けた時には、驚かされたものであります。余りにも勇ましい？声で授業をなさいます。その授業内容の特徴としては、

「わからなくてもいいね。」と言われながらも、納得のゆくまで十分教えて下さること。

「ある結論を引き出される時に、多くの例文を用いられるが、そのプロセスに無駄のないこと。

というような事が挙げられますが、このような授業内容も、偏に先生の曲がった事が嫌いな性格によるものと思われます。けじめのつかない時は、容赦なくお叱りになられます。しかし、授業中の雰囲気は、これとは違って実に和やかです。というのは、先生が数々の流行語をお作りになったので、皆それを聞き出そうとして、真剣に？授業を聞いているからです。「ベケ」「オッベケベ」「イチッチ」「アホ」（発音が面白い）などであります。

とにもかくにも、皆さんに、授業を受けてもらいたいのですが、

なかなかそうもいきませんので、増山先生について何がわからないかわからない人のために、ここに記しておくことにします。

平 先生



「黒鬼」の異名を持つ平先生、先生は担当教科英語にしてかつ硬式野球部顧問。悠久の昔よりこの大手前高校にて教鞭をとられ、師の薫陶を受けた生徒数知れず。またスリッパの音とともに神出鬼没、その動物的カンによって生徒の悪事現場をおさえることに天才的能力を発揮される。そして遅刻を人類の敵として憎まれる厳格な生活指導など、時間を超え、多方面にわたって大活躍、まさにエネルギーのかたまりのような先生であります。そしてそのエネルギーが我々の授業において最大に燃焼するのは言うまでもありません。まず、教科書の暗誦や先生の問いに答えられなかったりすると、教室から放り出される。たまには出席簿が飛ぶ。中でも極みつきはかのどなり声。一体どこにあれだけのパワーを秘めておられるのか、とにかくそのダイナミックサウンドの迫力は、一度それを聞くとハードロックなんて馬鹿らしくて聞けなくなれぬというほどのものなのです。

さて、それでは平先生は、ただ怒鳴りつけるばかりの鬼的存在なのかというと、それはまた違うのだと言いたい。大体平先生の御尊

顔は、微笑が実によく似合う。まさに百万ドルの笑顔であります。また、授業中話してくださる先生の経験談など、我々にとって非常にためになるのです（ほんま）。そうです、怒鳴りつけるのもこれ全て愛のムチ。我々が生徒の本分をわきまえた行動をしさえすれば人間味あふれたやさしい先生なのです。

黒 田 先生



ふとしたCHANCEで、筆者は十五年ほど昔の大手前高校の写真を見ることができました。（なんか、どこぞで見たことのある……あっ！）そうです。そこには、今より少し痩せておられる黒田先生がおられたのです。この写真の印象と今の先生を比べますと、よくいえば「贅肉」が、悪くいえば「一すごみ」がつかれたように思います。と言えば、「すごみなんてあるっ？」とみなさんおっしゃるかもしれませんが、こと英語や、責任感の有無に関しては、たいへんきびしい顔を、あの眼鏡の奥からなされるのです。目を大きく見開いておっしゃる一言が、雷より恐しい。反面、たいへん親身になって考えて下さる先生で、「君たちは流動的な歳なのだから、なろうと思えば何にでもなれる。一と励まして下さいました。」

一方、たいへん子供っぽい面もお持ちで、『スターウォーズ』を見てこられた時など、「君、あれ見てきたか？おもしろかった。……

べん見といで。ようできてるんや、おもしろかった。一と全く人のことを無視して『おもしろかった』を連発されるのには、さすがの筆者もしばし茫然！鬼ごっこでも、一番喜んで走って回おられます。

最後に、黒田昌司先生は、最も人手前の先生らしい人だと、筆者は思います。

鈴木先生



「ぼくがネッ、英語をネッ、教えているネッ、鈴木なんでスー。」と最初の授業の時に言われたかどうかは知らないが、鈴木先生は、いつも、こんな話し方をするのだ。そのためか、まねをする人も多く、ついに我がクラスでは君が、病気になるってしまった。

このような話し方をするところから、わかるように先生はとてもやさしく「善」のかたまりのような人である。だからいつもにこにこ、顔は つやつや 健康そうである。

(あのような顔を「夜店のステッキ」というそうである。)

さて先生の授業の特徴はというと、何か新しい単語がでてくるとその名詞形や形容詞形を聞かれることである。それと、急にその日に遅刻してきた者を当てることである。そのために、順番をかぞえてどこらへんが当たるか見当をつけている者や、今日は当たらないだろうと気楽にしている者の期待を裏切ることがよくある。

(先生、ずるいぞー。)

最後に、先生がいつまでも今のままで、まだ「夜店のステッキ」を売り尽くしてしまわないでいることを祈り紹介を終わろう。

松田先生



諸君ノ松田先生の授業中のお姿を熟視されたことがあろうか。

もし、そうされたなら、先生のおしゃれと表情の豊かさに驚かれることであらう。その授業の平面的なことに比して「顔面下半分謎の微笑」を付し、その空間的なこと。東大寺の象徴のあれに譬える者も少なくはない。

諸君ノ松田先生の授業中(特にR)予習拒絶反応の結果、先生の指名に際してのあの金剛石の如き日の輝きを恐れたことがあろうか。もし、その覚えあれば、御存知であらう。ところがまた、先生の指名の確率論的でないことを嘆く者も少なくはない。

諸君ノ松田先生の授業にて先生の華麗なる和訳を耳にされたことがあろうか。

もし、そうされたなら、先生の和訳の一語一句の鋭さに驚かれることであらう。その授業の叙情的ムードに陶醉しての中で、それを口述筆記し、英語にあらず日本語の勉強になると言う者として少なくはない。

ところで諸君ノ松田先生の授業(特にC)の延長のありがたき

とを知れ、その貴重なる延長を嘆いてはならないのだ。
そしてとにかく、松田先生は私たちのよき師なのです。

岸田先生



教室にはいってくると手を2回パチパチとたたいて「はい立って」
(礼) 授業はいつもこれから始まります。(筆者が3年間これをやらなかったのに気がついたのはたった1度だけです。)それから書き取りの小テスト。はきはきとした口調とよく通る声で問題を読みます。(あたりを見まわし)「S君、まだ2番までしか読んでないのにどうして4番まで書いてるの。」(爆笑、この意味わかる?) 授業が進みましてみんなが真剣に聞いていると急に大きなしゃみを「クシューン」(爆笑)「かんにん。」鐘が鳴りますと再びパチパチと2回「はい立って」(礼)で終わります。でも作文の時間などは必ず数人が質問に押しよせ、それに適確に答えてくれます。気軽に質問できる先生です。—— 恐怖の英語教師陣の中に紅一点ではあるけれどもとうにさっぱりとしたお人柄で今日もちょっぴり皮肉と大阪弁のまじったはきはきとした口調で活気あふれる授業を続けられる「岸田尚子先生」のぶろふいるでした。

平口先生



「そうやなー。別に取り柄もないし。これで言うて書いて欲しいこともないから。どんな風に書いてくれてもかまへんで。(やや声を小さくして) あんまり、くささんとしてくれよ。」

平口先生の紹介を依頼され、プロフィールで埋めれば何とかなると、甘い考えをもって、先生を訪れると、あの眼鏡の奥からの微笑を浮かべ、こうおっしゃったのです。

ところで、この言葉、いかにも先生らしい言葉です。決して自信ありげな態度をとらず、大声をはりあげず、やや物静かで、個性を抑え、他人に自分を知らさない。特徴を書くのもひと苦労です。

しかし、やや迫力不足の否めなり授業風景(先生は教室を歩き回ることはほとんどありません)にもかかわらず授業妨害質問が出ないのは、生徒の力量を越えたものを感じさせるせいでしょうか。

その他、一時話題をさらった昨年度体育祭のいす取りゲームの優勝、それに付随する某教諭との足の長さ論争など、ますます、その本質を見極められなくなってしまふ先生です。

最後に、先生のモットーが「他人に迷惑をかけるな。」であることを紹介し、先生には私のような英語無知蒙昧の生徒にも、いつまでも手を差し伸べて下さることをお願いして紹介を終わります。

岩 上 先 生



昭和三十年八月八日生まれで、今年の四月に教師になったばかりの大手前高校一若い女の先生。それゆえに教師になった今でも、つい生徒の立場になってしまい、予習をしてこない生徒に対して、ちよつと昨日は忙しかったのかなと思つてしまい、おこらずじまいになる、いけない事だと思うのですがとのこと。しかし、この前の授業の時は手ぬるくありませんでした。暗唱するように言われた女子が覚えておらず、横にいる子の方を向いて教えてもらっていました。そしてなんとか言い終えて着席。先生曰く、「〇〇さんは横向いたら思い出すのねえ。」(どつと皆笑う)

又、先生は読書が趣味です。あるとき、みんなが、今日は試験の答案が返ってくるだろうと思つていたら、「昨日忙しかったので答案つけていませんから、今日は返しません。……ところでいい本があるので、みんなに言っておくと、一〇△×□」っていうんだけど、おもしろくって読み始めたやらめられなくて。……あ、別に本読んでたから答案つけられなかったんじゃないねんよ。」うそのつけない人らしい。

以上、断片的に紹介しましたが、先生がやさしく、まじめで、生徒とのつながりを大切にする先生だということは私達が知るところです。

長 田 先 生



長田先生は今年から本校全日制課程に新任された若くてバイタリティーに溢れた先生です。

長田先生を形容するのに相応しい言葉、それは、「温厚である」「優しい」「明朗である」「カッコイイ?!」等で、これらの表現からも長田先生の人物像を察しただけだと思います。

一学期の初めの頃の授業では我々生徒側も少々緊張気味でしたので、リーダーの予習にも余念がなく、先生に指名されてもまずきちんと英文を訳しておりました。訳し方が怪しいと先生は、「うーん、ちよつとそこはおかしいなあ。」とおっしゃって、後、優しく穏やかな口調で訂正、添加して下さいるのです。

ところがいつの頃からでしょうか。先生の優しさに甘んじて、しばしば予習を怠るようになったのは、(故に当時のリーダーの嘆かわしい点)至極反省しております。

私的な事ですが、長田先生は修学旅行で我々クラスの催しに特別参加して下さいました。トランプをする時も我々と共に楽しんで下さいました。この場を借りて改めて感謝の意を表したいと思います。

「ありがとうございます。」——最後になりましたが、長田先生がいつまでも親しみのある温厚な先生でいらっしますように。

大 倉 清 校長先生

みんなが知っていてまだ一度も先生紹介に登場していない先生はもういないのか。いやいたいた。いや失礼おられました。いつも朝礼で「あゝおはよ」でおなじみの校長先生が残っておりまして。ここであつと形式を変えてQ Aでやってみましょう。

原稿の締め切りも間近にせまった11月4日土曜日午後2時過ぎ、どこかに出かけようとされているのをひき止めてインタビュしました。(インタビュー B Y N & W)

Q「出身地はどこですか。」

A「愛媛のミシマ。三つの島。」

Q「失礼ですがお年は?」

A「57才。」

Q「高校時代どんな教科が苦手でしたか。」

A「音楽とかねエ、体育やった。」

Q「きらいな動物は何ですか。」

A「……へびかなア。」

Q「自分を色で表わすと……。」

A「ん~~~~ピンクかな。」

Q「では趣味は。」

A「囲碁」

Q「生きがいは何ですか。」

A「元気で働くことかなあ。」

Q「もしあと1週間で地球が減びるとしたら何をしますか。」



A「一週間か。小説を読む。やっぱり司馬遼太郎だねエ。」

Q「1日で一番くつろぐ時間はいつごろです。」

A「夕食のときやるなあ。」

Q「これ聞いていいかなあ。」

A「何ですか。」

Q「あの初恋はいつごろですか。」

A「ないねエ。戦争があつたからねエ。でもしいて言えば25才のとき理科の先生やったかなあ。」

Q「それじゃ結婚は。」

A「見合いやった。26才のとき。」

Q「最後に大手上前生の特色をどう感じますか。」

A「明るいねエ。」

Q「男女別の長所短長は何ですか。」

A「男子の長所で一般に明るくてまじめやねエ。短所はそやねエ。野性的なファイトが足りないというか、上品すぎるねエ。悪い意味でスマートすぎるんちゃうかなあ。」

Q「では女子は。」

A「長所はやっぱりすなおで明るい。短所は……ないぞ。」

Q「聞き忘れてました。尊敬する人はだれですか。」

A「吉田松陰」

Q「ヘエ?」

A「知らんか。明治維新の人や。」

Q「はんうとに最後、大手上前に望むことは何でしょうか。」

A「遅刻しないことやなあ。」

Q「……。今日はどうもありがとうございました。」

文芸
憂鬱の女留片

二年五組 秦 光 広

胸苦しい秋の風が冷たく厭わしく少年の片隅を掠めていった。

少年の脳裏は吹き飛ばされてしまった。

重苦しい秋の陽が珍しく奇しく少年の影を貫いていった。

少年の瞳は焼き尽くされてしまった。

少年は今、射干玉の輪廻のまっただなかにいた。

少年は木偶のように疲れきっていた。

少年は凶夢のような煉獄での不安の予感を生命の根源的な一点の

神秘に探っていた。

少年はその日激しい恋をした。

万華鏡の眼のガラス細工の服を着た愛らしい女性。

瞳に浮かぶその女性の清らかな初めての恋の感覚。

溢れ出る可憐な愛の泉の旋律。

少年はその時初めて陽の光を眩しいと思った。

少年はその日愛を失った。

惜しみなく愛を与え惜しみなく心を奪われたあの女性。

瞳の中で輝くその女性の空しい後姿の絶望感。

押えきれない美しい涙の海の夕焼け。

少年はその時初めて空を見上げた。

少年が空の青さに気付くのは努力を要する。

少年が空の清さに気付くのは時を要する。

少年はその日一羽の鳥を殺した。

失恋したから殺したのかもしれない。

気まぐれに殺したのかもしれない。

それは少年にさえもわからなかった。

消え去りはしないはかない小鳥の抵抗の感触。

滲み出る艶やかな血の真紅の滴り。

少年はこの時初めて空は広いものと思った。

少年はその空の中の一片の雲を美しいと思った。

それは血に染まったあの鳥の容だったから。

少年は自分の宇宙空間はこの雲の中にあるのだとも思った。

風が吹いた。

風が過ぎると少年は一瞬、空を見失った。

少年は、自分が鳥を殺そうが殺さないでおうが、自然は止まらな

い、自分が死のうが生きていようが、あの女性にとっては全く関係

がない……… そう思った。

生と死の息詰まるかけひきの一瞬と思われた。

生と死が新たなはてしない軌跡をもって回りだした……。

心の回路を止め、無になって下流に漂へ

死ぬのではない 死ぬのではない

すべての思考を置き 虚空に降服せよ

輝いている 輝いている

内なる意味を語るため

語っている 語っている

愛がすべてですべての人が愛だと

知ることだ 知ることだ
無知と焦りが死者を弔うとき
信じることだ 信じることだ
しかしおまえの夢の色に誤け
生きることではない 生きることではない
偽りの人生を全うすることでもない
はじまりの はじまりの

(Tomorrow never Knows)

どれだけ時が過っただろうか。
少年は空を見上げた。
そして陽の光を受けた。
少年は思った。
自分の存在がこのはるかな宇宙の中に点としてでも残るなら、いつかは線が引かれ、いつかは面がくぎれる……と。
少年は立ちなおりつつあった。
少年は空の青さに気付きつつあった。
少年は空の清さを感じつつあった。
少年は陽の光を眩しいと思った。
あの女性を愛したときと同じように。
少年は今までの自分を振り返ってみた。
自分の落ちた暗い深い穴、卑しい欲望、乏しい感覚、自分の存在を形づくっている墮落した道、むなしい希望……。
少年は戦った。

強い衝動と新しい気分が自分の絶望的な運命と戦った。
そして勝った。
少年は希望を持った。
この苦しみ この淋しさから抜け出せそうだと思った。
少年は歩こうと思った。
新しい人生のために歩こうと思った。
ふと、少年は足元にある小鳥の死骸を見つけた。
「あつ。」

少年ははじめて言葉を発した。
少年の足が止まった。
少年は静かだが激しい失意を胸に抱いていた。
少年は空を見上げた。
何んと空の青く鮮やかであったことが、

The long and winding road
That leads to your door
Will never disappear
I've seen that road before
It always ~~~~~。



神・人間・平穩——「野火」を読んで——

一年二組 清水 弥生子

「野の百合はいかにして育つかを思え。勞せず紡がざるなり。今日ありて明日炬に投げ入らるる野の草にも神はかく装ひ給えば、ましてや汝らをや、ああ信仰仰うすき者よ。」

敗北が決定的となつたフイリピン戦線。赤い絵の具で描いた世界。結核のため、たつた六本の竿と共に隊から追放され、入院不可能だと知れた病院へ送られた田村一等兵。飢えの爲、ただひたすらに食物を求めてさまよい歩き、深い雑草で命をつなぐ。そして目に見る薄紅の花。「私を食べてもいいわよ。」という自己の誘いにのせられて、それをちぎろうとする右手と抑制する左手。そして耳にする神の声。そして自分のからだを喰ひにきた虫に身を任せる——彼は思う——今まで反省なくして木や草や動物を喰つてきたことは、死んだ人間の肉を喰うよりもっと罪悪だと……。木や昆虫やらには生命があるのだから……と。

それなら、なぜ彼は命をつなぐ為に死んだ人間の肉を喰べようとならないのだ？ みんなやっているじゃないか？ 松永も、安田も、お前は二度も松永に銃口を向けられているのだぞ！ 彼は松永が殺した人間の首や足首や、食用にならない部分が腐敗してどろどろにけて変形しているのを見て、大きな衝撃を受けた訳ではないのだ。彼自身が「人間はどんな異常の状態でも受けいれることができるものである。」とさえ断言しているのではないのか？ それでも彼は食べようとしな。もっとも松永の勧めで二本足の猿の肉は喰ったのだが……。

私も田村と同じ人間だ。だから人肉嗜喰ということの意味を把握てはいるつもりである。彼は言う。「戦争を知らない人間は、半分は子供」なのだ。ゆえに、私などは全面的に子供だ——だから偉そうなことは言えないのだが。私が思うに、彼は青年時代、「神」という存在を知った爲に、その後、どんなに神に否定的な原理をつくり出しても、裸の状態になった時、人間本来の弱さ——人間らしさを自ら認めた時、神にすがりついてしまったのだ。彼の様に白人天使であると言え錯覚することがあるのかも知れない。彼が孤独の内にいて村の十字架を見に行ったのが動かぬ証拠ではないのか？ 私のも神の教えを信じる人間の一人である。だから彼の気持ちが少しならわかる。一度神の教えを知ってしまった以上もう元に戻れないと思う。彼は言う。「神がいた。だから屍体と一緒に生きていくことを私は少しも恐れなかった。」と。自分の肩の肉を喰った彼。人肉嗜喰——自分を侵すことはできても、人を侵すことのできない心——優しさとても表現し得るであろうか。

病院から追い出された者のグルトブ。自分の前にあるのは死だけだ……と感じていた田村は、あまりにも抵抗なく仲間を見捨てて歩む。死に場所を求めて……。しかし、命令によってパロンポンへ行く時の彼は違う。彼の目指すものは「死」ではない。「生」である。だから前線に倒れた者を見るのがつらかった。そう考える余裕があっただけ、彼は自分のことしか考えない人間より神に守られていたのである。人間らしさの現れである。

人を殺すことは、悪いことに決まっている。その点において彼には責任がある。安田と田村が一発の手機弾の為に剣を向け合う。松永が田村に再び銃を向ける。そしてまた安田は田村、松永に敵意を

THE ANGEL IN SCHOOL

示し、松永が安田を撃つ。そして目の桜色の生暖かい肉に田村は吐く。又吐く。もし人間が、飢えの果てに互いに喰い合うのが必然であるならば、この世は神の怒りの跡にすぎない。” 田村は、自分が神の代行をする義務感さえ感じ、松永に銃口を向けた

飢えは、なぜ生きた人間同志から、信じ合うことを奪ってしまうのか。人間同志がここまで手段を選べるものなのだろうか。私には恐ろしすぎて考えられない。そんなにまで我をむき出しにしてよいものなのか？ただ他人であるゆえになのか？恋人や夫婦なら？世はやはり、神の怒りの跡にすぎないのか？ちがうノちがうノそれじゃあこの世に愛など存在するものかノ——しかし彼らは友人だった！戦争はむごい。私はその体験を持たない。持ちたいとは思わない。一生、半分子供のままでいい……と思う。これは甘えだろうか？今の私にはよくわからない。ただ今日の平穏をうれしく思い神に感謝する。そして私たちが心に置かねばならないこと——今日の平穏は無償ではなかったこと。戦争は家族を崩壊し、田村の場合のように、夫と妻の愛情さえ奪う時がある。——むごすぎる——

子供のままでいい。

口が覚めると小鳥たちがさえずっていた。そこは赤い絵の具で描かれた世界ではなかった——野火も、目に映ることはなかった。そして今——誰もがそっと心に思う——もうこの平穏を失わないようにしよう……と。

二年五組 坂下 秀

「ANGEL」1. これは我々の住む地上界を離れることX光年の

彼方（Xは任意の複素数）にある天上界に埋まっている鉱石の一種（遷移元素であることに気がつく）

(i) Xが正の実数の場合

天上界は我々の住む三次元空間内にあり、しかるべき努力をすれば、容易に解答欄に正解を書くことが出来る場合。努力の後には天使が幸福を運んでくれるような時である。

(ii) Xが負の実数の場合

天上界の存在をはるかに超えて、天才と紙一重の差でmadな領域に自分が踏み込んでいる場合。（境界紙上は含まない。） (i)の場合の“しかるべき努力”をすることに熱中のあまりこの領域に入り込んでしまうこともあるらしい。（勉強のし過ぎに注意。）

(iii) Xが0の場合

自分はまさしく天上界に存在している場合。容易に解答欄は正解で埋まってしまう。そしてついでだからといって隣人の解答欄も埋めてや

ろうと思ってしまうことも多い。しかしこの状態になるには“ナポレオン”で“スピードで十九枚”で勝利するよりもむづかしい。

(Ⅳ) Xが虚数の場合

上を見ても下を見ても、隣人の解答欄を見ても、解答を発掘できない時。某教科においてよく発生する。

付録

(Ⅰ)と(Ⅳ)までのそれぞれの対策

(Ⅰ) 日頃からの反復練習と記憶と創造力の練磨が必要である。実戦となれば、日頃の成果を発揮し、最期の手段として、創造力に頼る。(記述式には大いに役立つであろう。)

(Ⅳ) ここでは休息が必要である。最も効果があるとされているのは“Fever”することとされている。しかし、(Ⅳ)の状態に推移する可能性が大であることに注意。実戦では、創造力と“鉛筆ころがし”に頼る。

(Ⅲ)

対策ってなにをするのかわからない。なったことがないのにどうしてわかる？

ただし、あこがれだけではたどりつけないことに留意。

(Ⅳ) ここでは日頃の努力の方向に二つある。

① (Ⅲ)の状態の人間の近辺に存在するように心がける。この場合、普通以上の視力が必要である。しかし、実戦で実行中に発見され、連行されるケースもあるため、おすすめ品とは断言できない。

② (Ⅰ)の場合と同じことをする。また、この場合、生活の改革も必要となる場合が多い。そういう場合、“〇〇指導部から、二つか三つの注意”を受ければ、改善される。

「ANGEL」2.

異性どうしが、客観的に見て必要以上に接近している場合の、それぞれが、相手を純主観的に見た場合の相手の姿。(男性が女性を見た場合は、こう見えることがあるが、女性が男性を見た場合、彼女らにはどう映るのだろうか？筆者はよく知らない。)

筆者もこういう状態に到達したいものだと思う。しかしこのことは、お互いの同意が必要であり、つまり必要十分条件が整うことが必要である。

「ANGEL」3.

ショート・ショート

太陽系の一番端の惑星Fから一機の宇宙船が地球に到着した。宇宙船の乗組員T、Nが話していた。T「この星での学生は、授業態度が悪く、先生の話もろくに聞かずに居眠りばかりしているのだそうだ。」

N「じゃあ、この星は、この爆弾の実験に使うのに持ってこいね。」
T「ああ、この爆弾なら計算によるとこんな星ぐらい案に爆破できるぞ。」

N「そうね。こんな星なら爆破しても宇宙会議で非難は受けないわ。」
T「ああ、でも今一度、確認のため地上に降りてみよう。」

N「わあ、ここはどこ？あの変わった建物は何かしら。」

T「さっそくコンピューターで調べてみよう。ここは、Japan Osaka Higashi-kuだ。あれは、大阪城とかいうものらしい。ああ、ちょうどここに高校がある。」

N「入ってみよう。」

T「なんだこりゃ。居眠りしている奴なんか一人もない。（これは○○君）調査ミスだ。みんな真面目に勉強しているじゃないか。」
もう少して、誤ってこの星を破壊するところだった。確認してよかったな。」

N「他の星を搜しましょう。」

T「そうしよう。」

そう言って二人は、宇宙船に乗り込み、地球を去った。そして、その日の日付は十月九日、そう／＼中間テストの第一日目だったのだ。」

（水泳部クラブノートより）

「鏡」考

三年八組 安田 千恵子

あなたは 深夜の鏡を見たことがあるだろうか？

夜の闇を吸いこんだまま、なおかつ鈍い反射を放つその不思議な平面は、時として、人を神秘の世界へと誘いこむ。いや、昼間でさえ鏡は、しばしば人の心を惑わせ、ともすれば幻想の国へと迷いこませてしまう。たとえ、視覚の上だけであっても、同じものを同時に二つ以上存在させ得る”というのはあたりまえの現象として片づけてしまえば、あまりにも悪魔的でありすぎるような気がするのだ。悪魔的——そう、これはど背神的なものが、他にあり得るのだろうか。”真実はただひとつ”という神の絶対普遍の節理にそぐわないものが、鏡の他に存在するだろうか。鏡に映った影も、その映されるべくある物体も、どちらもが真実であるのだから——。

鏡というものが、いったいいつ頃からこの地上にあったのか、あるいは、どういう経緯で人の手にされるようになったのかは知らないが、初めて発見した人は、さぞや驚き恐れたことであろう。

江戸川乱歩の初期の短編小説に『鏡地獄』というものがある。

これは、鏡に異常な興味を持った男がそれを使って様々な異様な実験を重ねた果てに、内壁全体を鏡にした巨大な球を制作し、自らその中にはいつて発狂してしまふ、という物語を、その友人の回想談という形式で描いた小説である。

いったい、球体の内側にはりめぐらせた鏡にはどんな影が映し出されるのだろうか——この小説を読んでからしばらくの間、私は真剣に考えたものだった。前面には前向きの姿が映って、後方には後姿

が映って、側面には横から見た姿が、いや、前面と側面の間にもそのまた間の鏡面にもそれぞれに姿態が映るし、上にも下にも斜め上方にも下方にも映るから……そう考えていけばいく程、頭の中に描いた像は混乱してゆくばかり——。小説の中で、語り手である友人はこう語っている。「球体の鏡の中心にはいった人が、かつて一人だつてこの世にあつたでしょうか。その球壁に、どのような影が映るものか、物理学者とて、これを算出することは不可能でありましょう。それは、ひょっとしたら、我々には、夢想することも許されぬ、恐怖と戦慄の人外境ではなかつたのでしょうか。それはいわゆる凹面鏡によって囲まれた小宇宙なのです。われわれのこの世界ではないのです。もっと別の、恐らく狂人の国に相違ないのです。」と、球体の内側が、はたして彼の語るとおり狂気に満ちたものであつたのか、あるいは全く反対に、得も言えぬ幻想的な美しさに満ちたものであつたのか、どんな物理学者でも算出不可能であろうと言われることを、ましてや物理の不得意な私には、知り得ようはずはない。しかし、知り得ようはずがないからこそ、想像力はかきたてられて、無限に広がってゆく。自分をとりまくわずかの空間を反射して影像を映し出す閉ざされた曲面には、全方位からの自分の姿が展開図のように繰り広げられ、その繰り広げられた影像から、さらに新たな影が生み出されてゆく。球壁いっばいに広がった 絵巻物のような自分に向かって、どんな言葉が言えるだろうか。球の内部は、すでに三次元と異次元とを結びひとつの独立した閉区間となつてしまっている。その中では、直線的な思考から派生したものである限りどんな言葉も意味を成さないであろうし、三次元的発想をもつて表現し得る言葉の数々も、結局無に等しいものであらう。

鏡——この摩訶不思議な超三次元的物体。その前に立ったとき、私の空想はとりとめもなく発展してゆき、決して停滞することはない。

~~~~~ 編集後記 ~~~~~

今年でスプリングは十九年目。まだ二十年前です。成人式を迎える前の若さにあふれるスプリングです。しかしながら、十九年目に於いて、マンネリという恐い波紋が押し寄せています。これに立ち向かうために「スプリングの原点にもどろう。」というのをモットーに製作してきました。今年、アンケートは行ないませんでしたが、座談会を復活させ、文芸の量も増やしました。この改革は少なからず成果がありました。特に座談会では、現在活動が続けている後期役員と、一自治会会員にもどった前期役員との意見の交換は、結果的には、他校訪問よりも意義があつたのではないかと思います。また文芸でも、もっと広い分野のものも取り扱おうと、読書感想文やクラブノートからも原稿を集めました。

来年は二十号。これから先続くであろうスプリングの・つの節目として、恥かしくないりっぱなスプリングを作ってほしいものです。

昭和五十三年十二月 後期文化部長 永田洋男

編集委員及び協力者

永田洋男 和氣潔士 川島えみこ 平岡重子

森本文雄 筒井和幸 新井隆俊 坂下 秀

その他に、美術部・文芸部・自治会役員

各クラス文化委員・各クラブ部長

投稿・校正いただいた先生方

最後に一言……「ほんとうに御協力ありがとうございました。」